授業に役立つ！！　渥美半島の歴史

R03.8.25

田原市博物館
副館長（学芸員）
天野　敏規

渥美半島の歴史

田原市の概要

愛知県の最南端・渥美半島の大部分を占める

東西30km、南北15．5km、面積191．11km²

人口　60，426人（男30，511人・女29，915人）

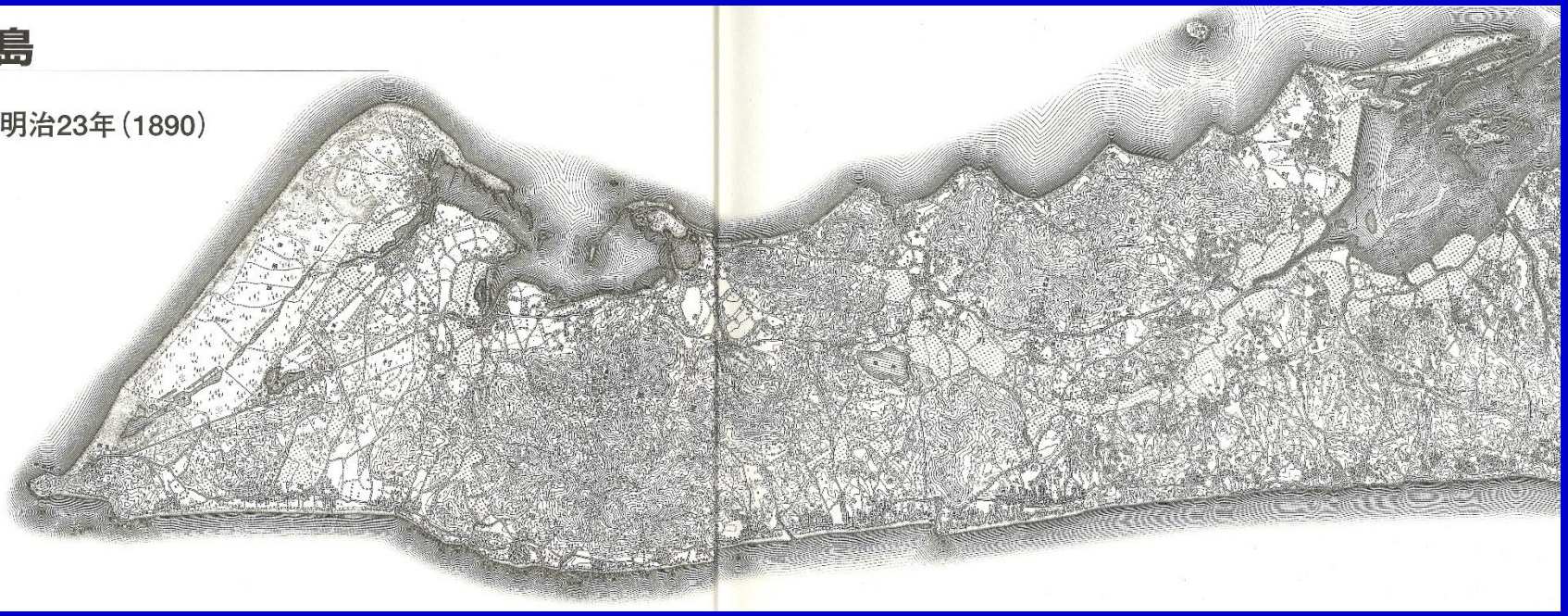
世帯　22，496世帯　　R3（2021）．7．1現在

郷土（渥美半島）の歴史は、教科書（日本史）と関連づけられることが多くあります。

渥美半島の歴史の概略を知って、授業等で活用していただけたら幸いです。

渥美半島

明治23年（1890）



1947（昭和22）年に撮影された渥美半島の航空写真

1947（昭和22）年8月18日 アメリカ合衆国空軍撮影（USA-M415-1-42～51）

※半島西側の太平洋岸沿いにある黒い線は、原写真の境界部分

旧石器時代の渥美

24，000～13，000年前

宮西遺跡（大久保町）、長代遺跡（野田町）ほか

出土遺物

縄文時代の渥美

3000年前

伊川津貝塚（県指定史跡）

発掘風景（伊川津遺跡）

保美貝塚（市指定史跡）

＋川地貝塚（亀山町）

吉胡貝塚（国指定史跡）

←縄文・「貝塚」ならここ

「吉胡貝塚史跡公園　シェルマよしご」

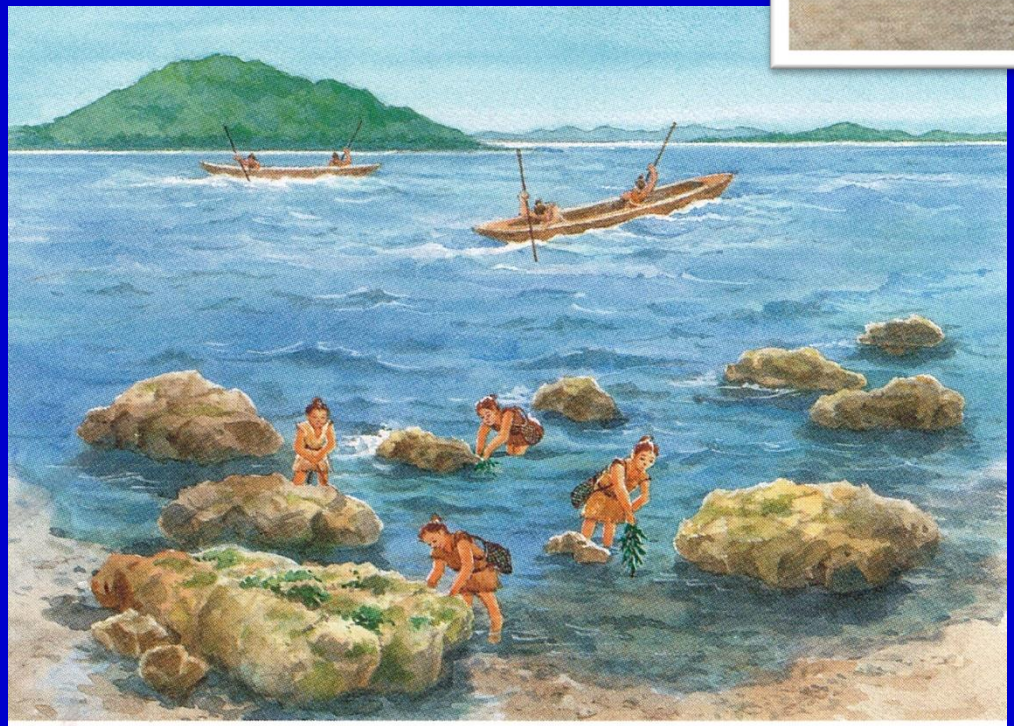
渥美半島の貝塚分布

稲荷山貝塚
豊橋
大西貝塚
三　河　湾
吉胡貝塚
神明社貝塚
八幡上遺跡
伊川津貝塚
渥美半島
保美貝塚
北屋敷貝塚
川地貝塚
下地貝塚
太　平　洋
伊良湖岬

■自然とともにくらす

内湾
貝／ウチムラサキ・イタボガキ・スガイ・アカニシ・イボニシ
魚／メバル・アイナメ・カサゴ・ニシン・アジ・サヨリ
海藻類
浅瀬
貝／ハマグリ・アサリ・アカニシ
魚／スズキ・クロダイ・ハゼ・フグ・ボラ・アカエイ・サメ
干潟
貝／マガキ・ハマグリ・オオノガイ・オキシジミ
ハイガイ
魚／スズキ・ハゼ・ボラ・アカエイ
川・池
貝／ヤマトシジミ
魚／ウナギ・コイ
鳥／アビ・カモ
獣／カワウソ
野山
植物／スタジイ・クリ・ワラビ・ヤマノイモ・ユリ・クズ・ノビル
ヒガンバナ・ノブドウ・ヤマモモ・アケビ・ムベ
獣　／イノシシ・シカ・ノウサギ・タヌキ・アナグマ・
キツネ・ニホンザル
鳥　／キジ
外洋
魚　／マグロなど
動物／クジラ・ウミガメ・イルカ
貝　／ダンベイキサゴ・チョウセンハマグリ（ヘラ用）
サトウガイ・ベンケイガイ（貝輪用）

表浜



内湾

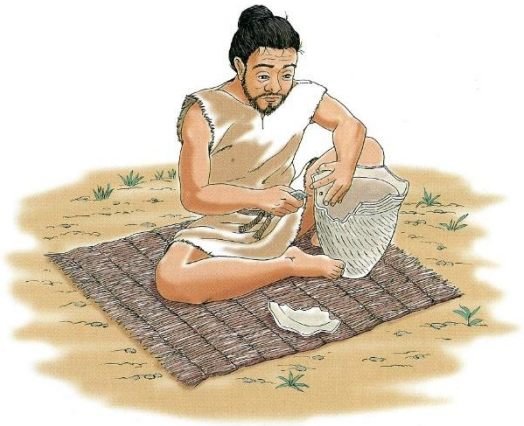
干潟の網漁

狩猟

採集

■縄文人から学ぶくらし

縄文人たちはゆたかな自然によってもたらされた資源を、感謝を込めて大切に使っていました。自然との関係を大切にしていたことがわかります。現在さかんに行われている環境保護活動の原点が、すでにこの時代にあったのです。私たちの失いつつある、ものを大切にする「こころ」を知ることができます。



折れた石斧をハンマーに再利用

穴を開けひびを直し、樽おけに利用した壺（底部）

きれい好きな縄文人

貝塚の土を洗うと、小さな骨・炭つぶ・巻貝のフタ、また石器をつくったときの石クズまで見つかります。縄文人はわずか数ミリの小さなものまで貝塚に集め、ムラの中をきれいに管理していたことが想像できます。

貝塚の土を洗って見つかった細かな遺物
石器作りで出た石くず・炭つぶ・小さな貝

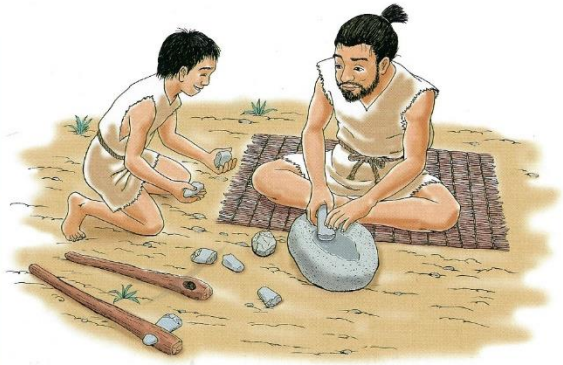
骨製ヤスの再利用

鹿角製根バサミの再利用

物を大切にする心

ひびの入った土器はそれぞれ穴をあけ、ひもで結んで直していました。切れなくなった石のナイフは打ちかいて、欠けた石斧も研いで刃を作り直します。さらに短くなって斧として使えなくなったら、ハンマーに使うなど使い込みます。折れた骨製のヤス、角製根バサミも作り直します。物を大切に使う意識の原点が伝わってきます。

穴が開けられた土器



自然を大切にする

縄文人は自然環境を最大限に利用し、さまざまな資源を活用してきました。縄文人の好物であったハマグリは、小さなものを採らず、資源がなくならないように配慮しています。自然資源へ頼って生活すればするほど、自然との関係を大事にしていたことがわかります。

集骨墓

←風習→

叉状研歯のある頭骨

盤状集骨墓

貝輪（オオツタノハ）

←交流

交流する文化とモノ

貝塚からはこの地方で見られないものが見つかります。このことから黒潮流れる太平洋に面した渥美半島には、さまざまな文化が行き来していたことがわかります。海はすべてのものとつながる万能な道だったからです。すでにこの時代に、列島規模で人、モノ、文化の動きがありました。

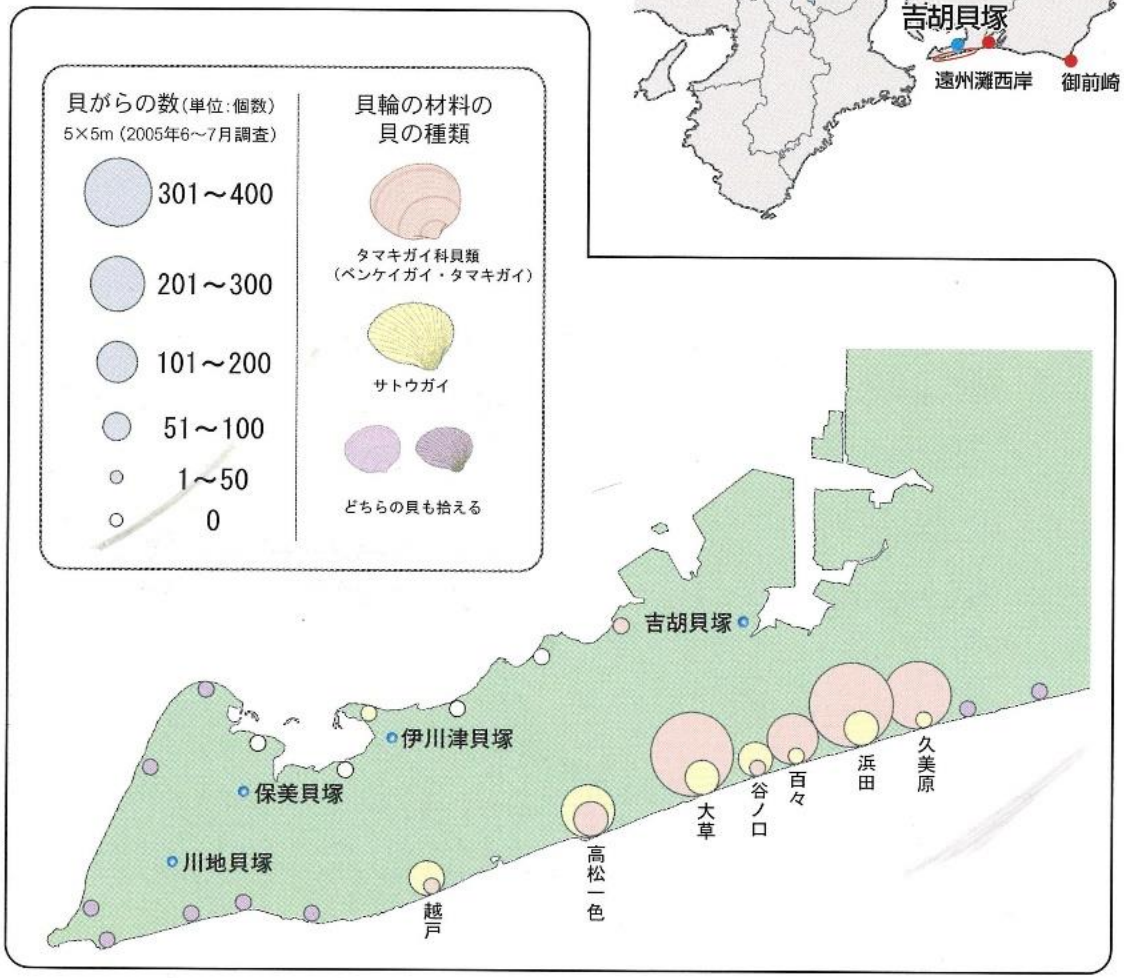
土器が伝わる

吉胡貝塚をはじめとする渥美半島では、さまざまな地域に由来を持つ土器が見つかっています。

◆西日本・近畿地方

◆東北地方

渥美半島で貝輪の材料となる貝が拾えるところ



オオツタノハ

貝のアクセサリーの中で最も人気が高かったのはオオツタノハで、完成品はもちろんのこと壊(こわ)れたものまで大事に使われ、流通していたようです。その他タカラガイ、イモガイをはじめ貴重な貝は、縄文時代から現在にいたるまで人々の心をはなさないタカラモノです。

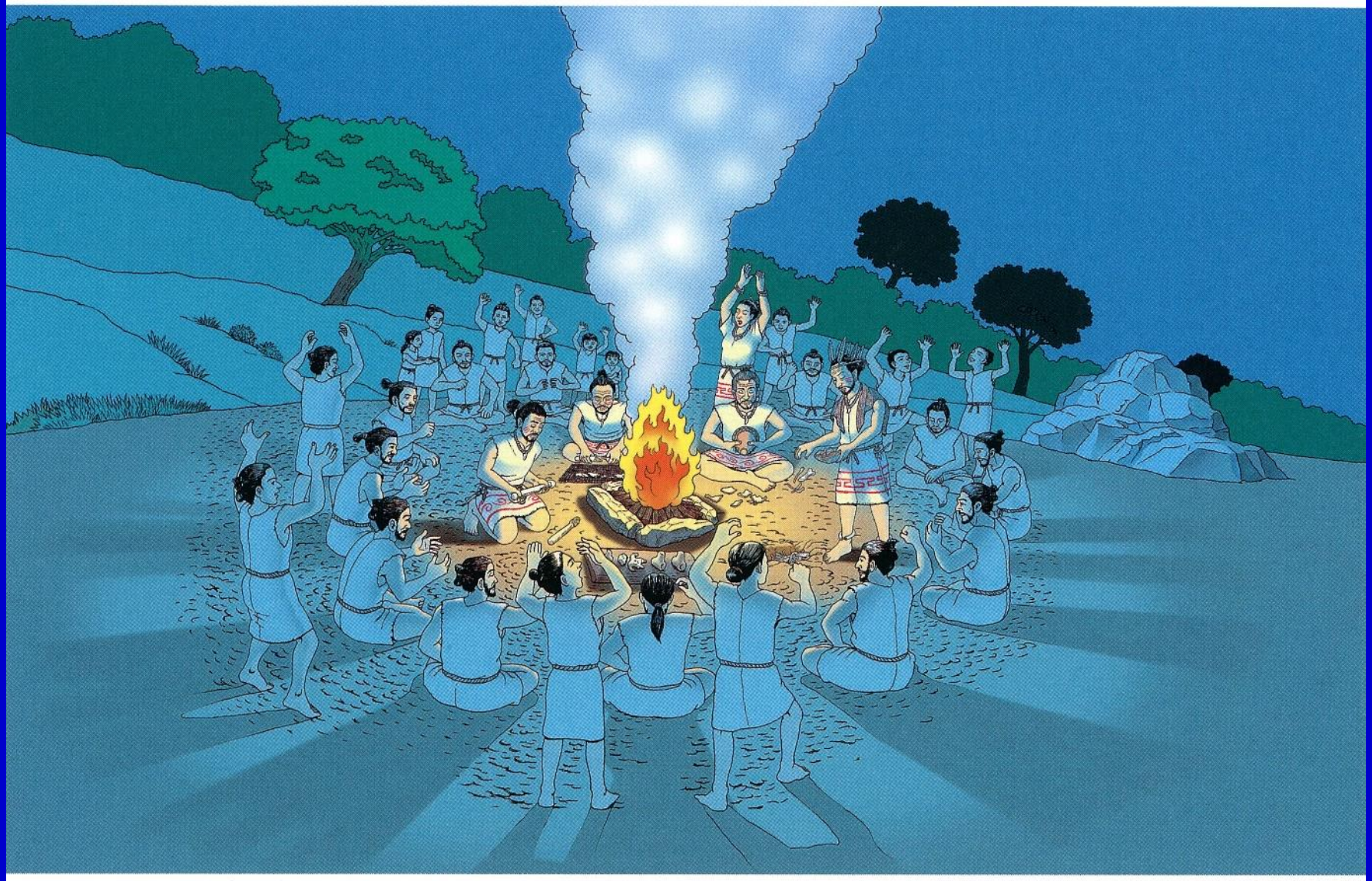
環状木柱列（保美貝塚）

←大規模集落

特異な風習
（埋葬形態）→

盤状集骨墓（保美貝塚）

貝塚でのマツリ



貝塚でのマツリのようす

弥生時代の渥美

2000年前

大本貝塚

羽根貝塚

八幡上遺跡

小森遺跡

清水遺跡

近畿式

六区袈裟襷文銅鐸　→

三遠式

銅鐸（×）

渥美半島が近畿の文化圏にあることを示す

・農耕（米づくり）の定着

・金属器の使用

（青銅器→鉄器）

銅鏃・銅鐸の出土

椛（なぐさ）の銅鐸

＊堀山田の銅鐸

古墳時代の渥美

1500年前

←大和朝廷（近畿）とのつながり

藤原古墳群

藤原古墳（石室内部）

藤原古墳（須恵器）

藤原古墳（金銅装大刀）

＊大和政権よりの威信財

■漁労の民

198　製塩土器／藤原2号墳

199　高坏／北地5号墳（日間賀島）

藤原古墳群と北地古墳群

197　石錘／北地5号墳

200　高坏／藤原1号墳

＊石材（花崗岩）は、

篠島・佐久島から

1500～1000年前

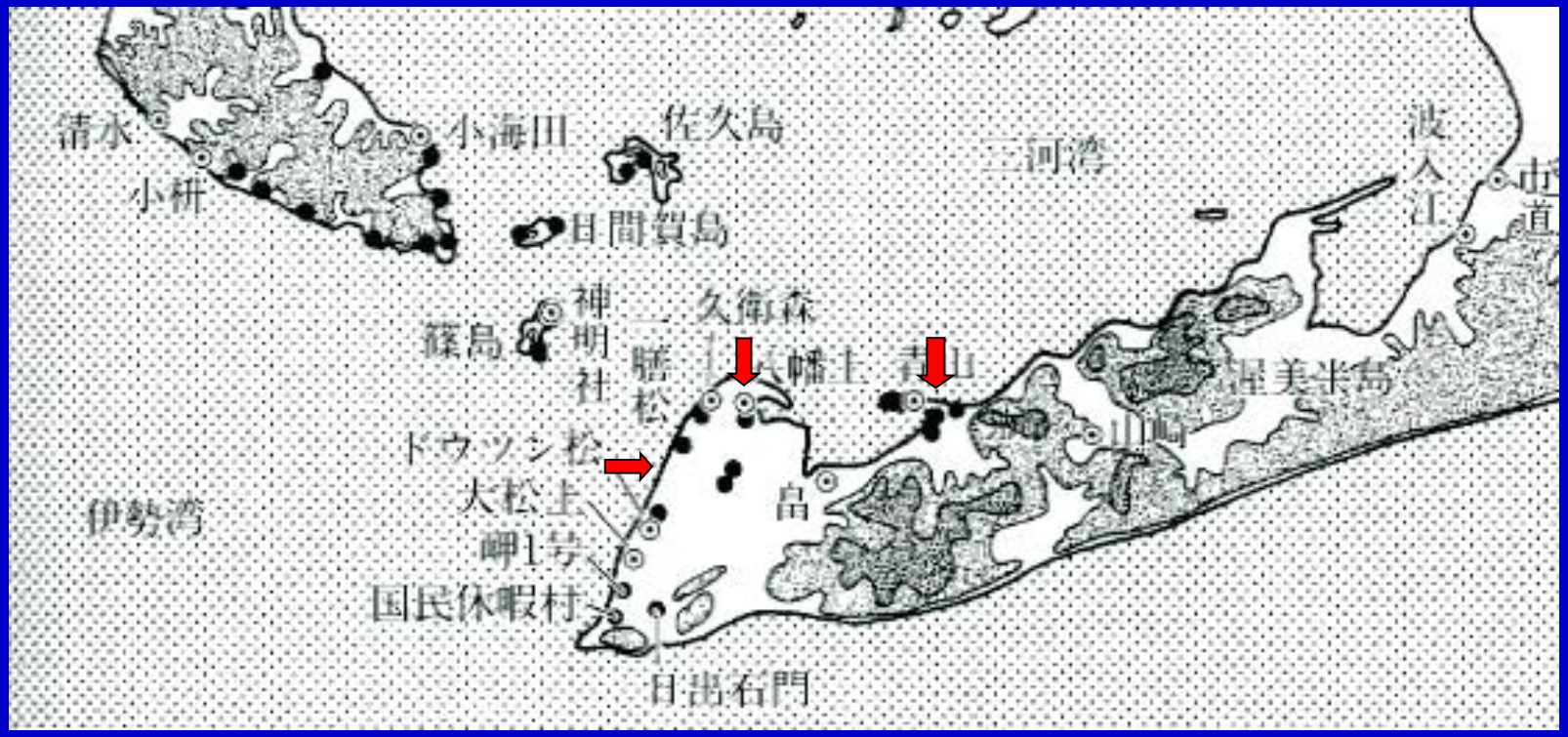
古代製塩と渥美

■土器による塩づくり　　古墳時代～奈良・平安時代

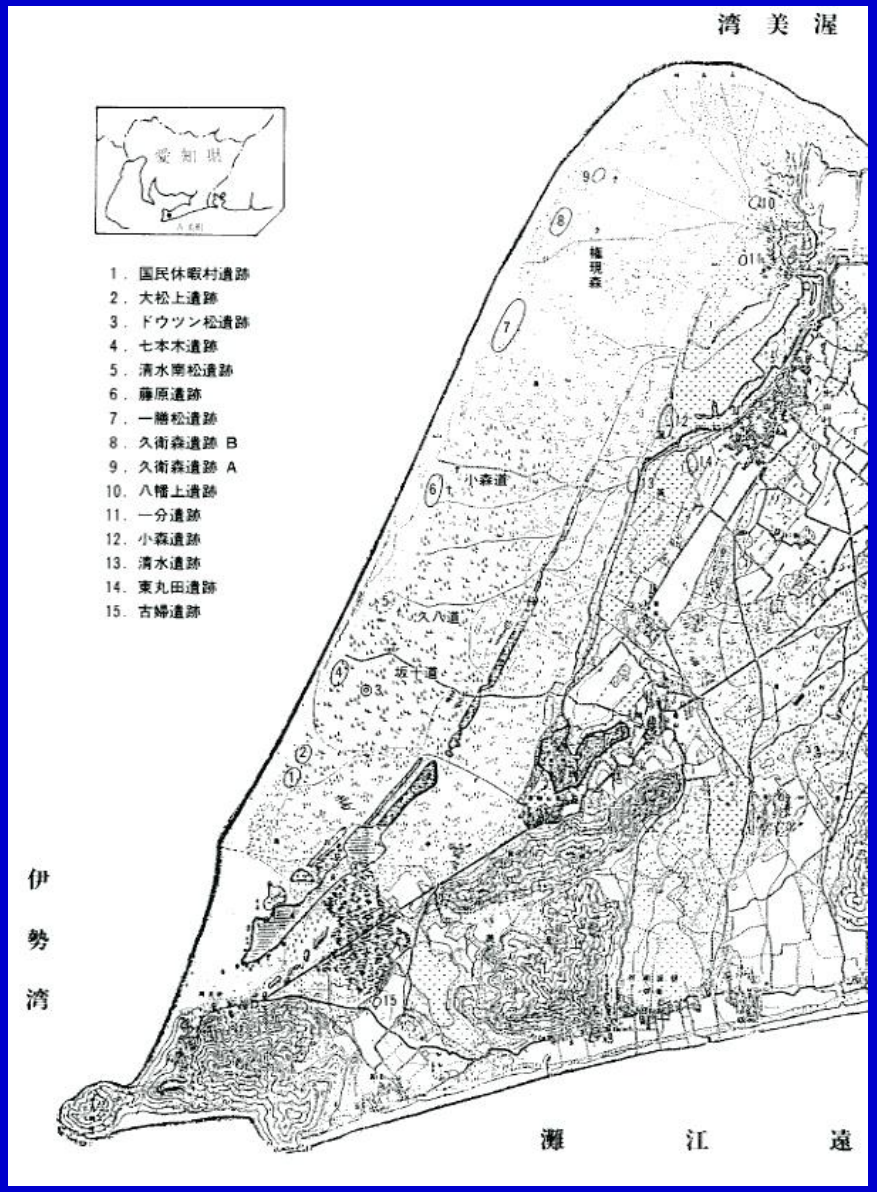
製塩土器⇒せんごう（煎熬）工程で使用

■塩づくりの場所（遺跡の分布）

伊川津地区・中山地区・西山地区



西ノ浜にある製塩遺跡



現在も残る製塩遺跡（岬１号遺跡）

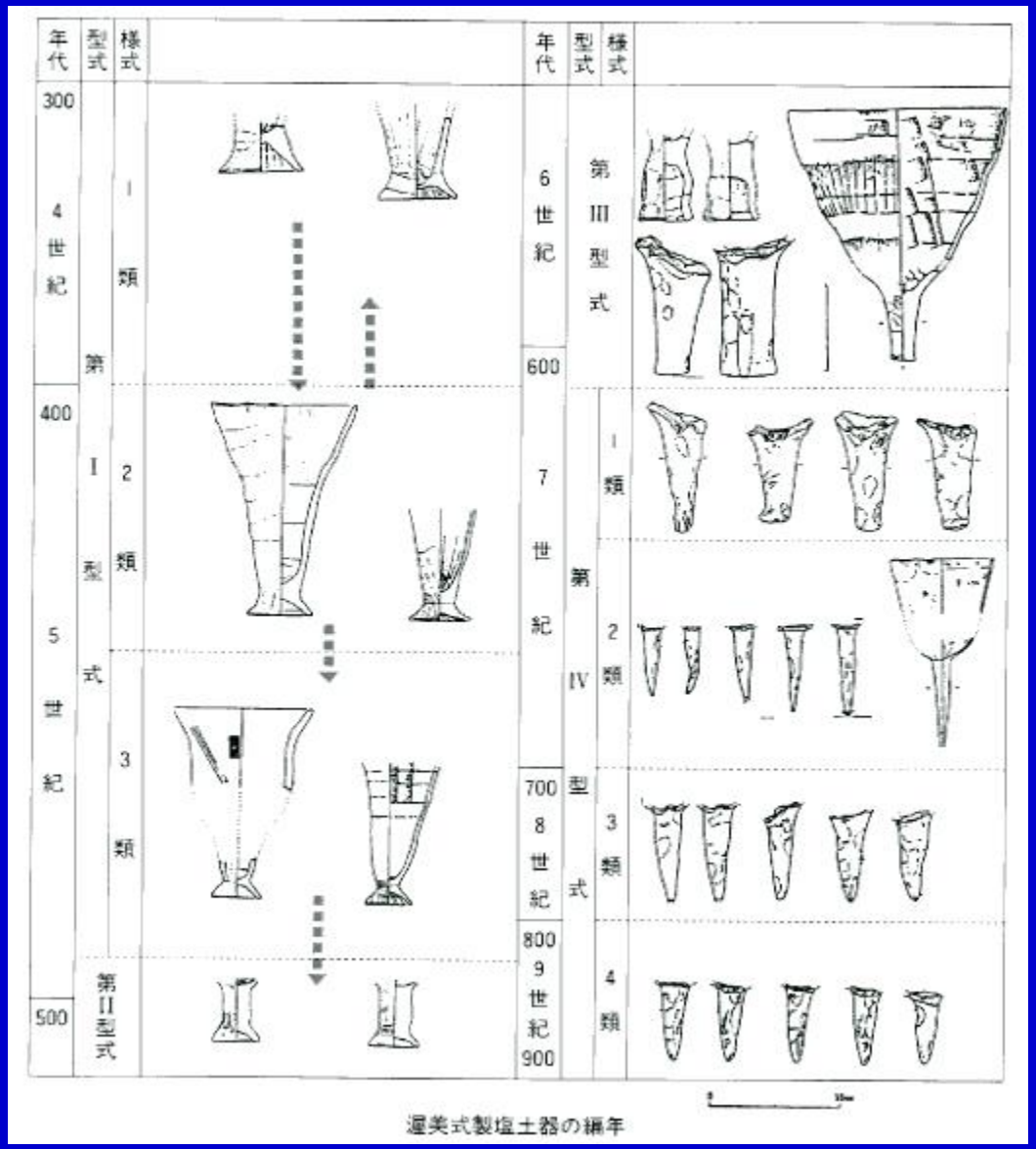
調査された製塩遺跡（ドウツン松遺跡）

製塩マウンド

製塩マウンド（拡大）

製塩遺跡断面図（東海市・松崎遺跡）

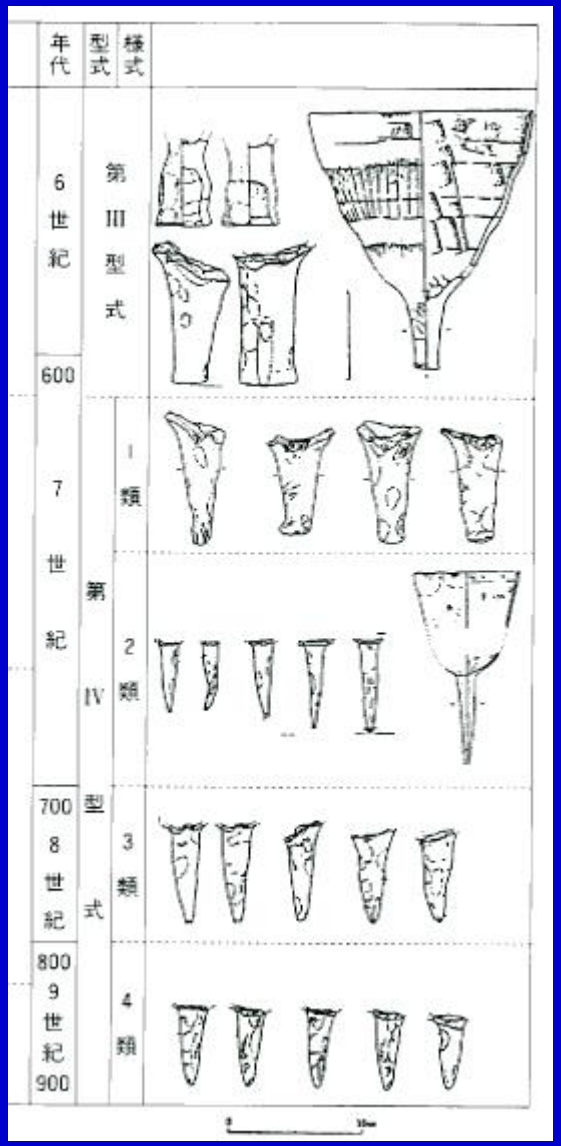
■製塩土器のかたち　　渥美半島



渥美式製塩土器の編年

■製塩土器のかたち

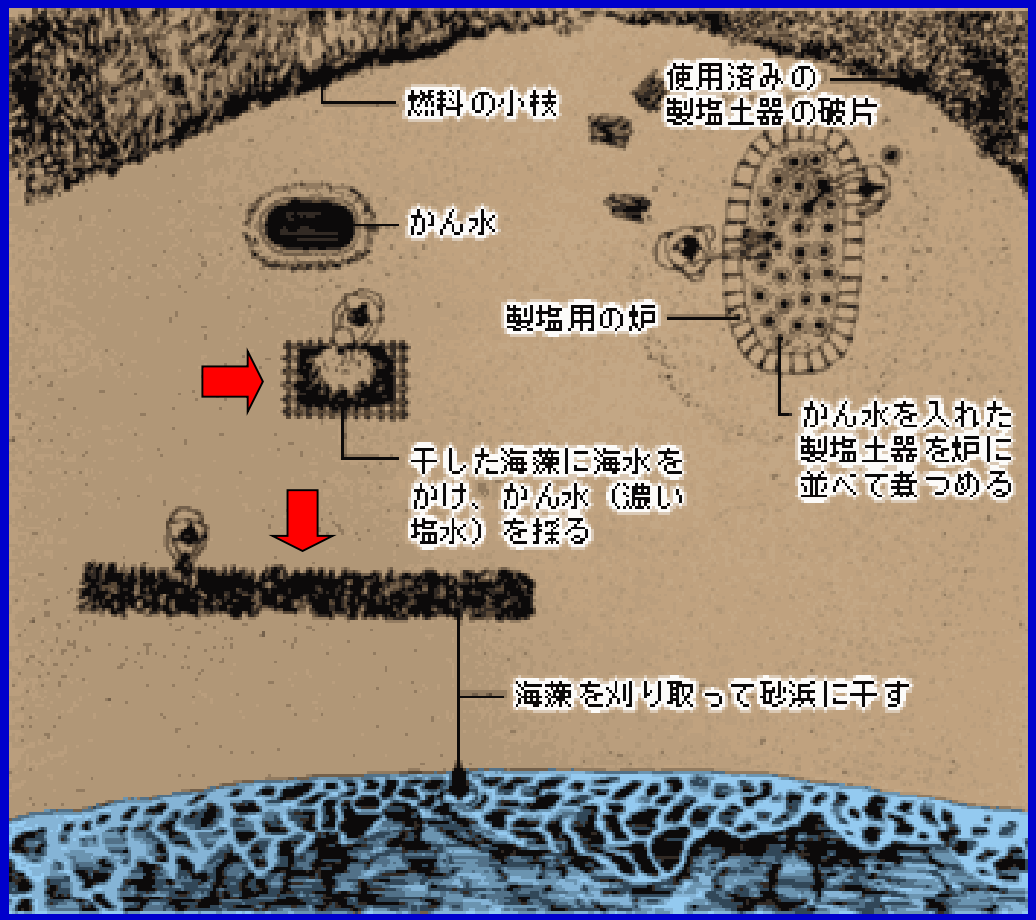
渥美半島



■さいかん（採鹹）の方法

●藻塩（もしお）焼き→<u>さいかん（採鹹）工程</u>

海藻⇒<u>アマモ・ホンダワラの使用</u>



たばこと塩の博物館HPより転載

アマモ

ホンダワラ

製塩炉跡

■地域の特産物（塩）

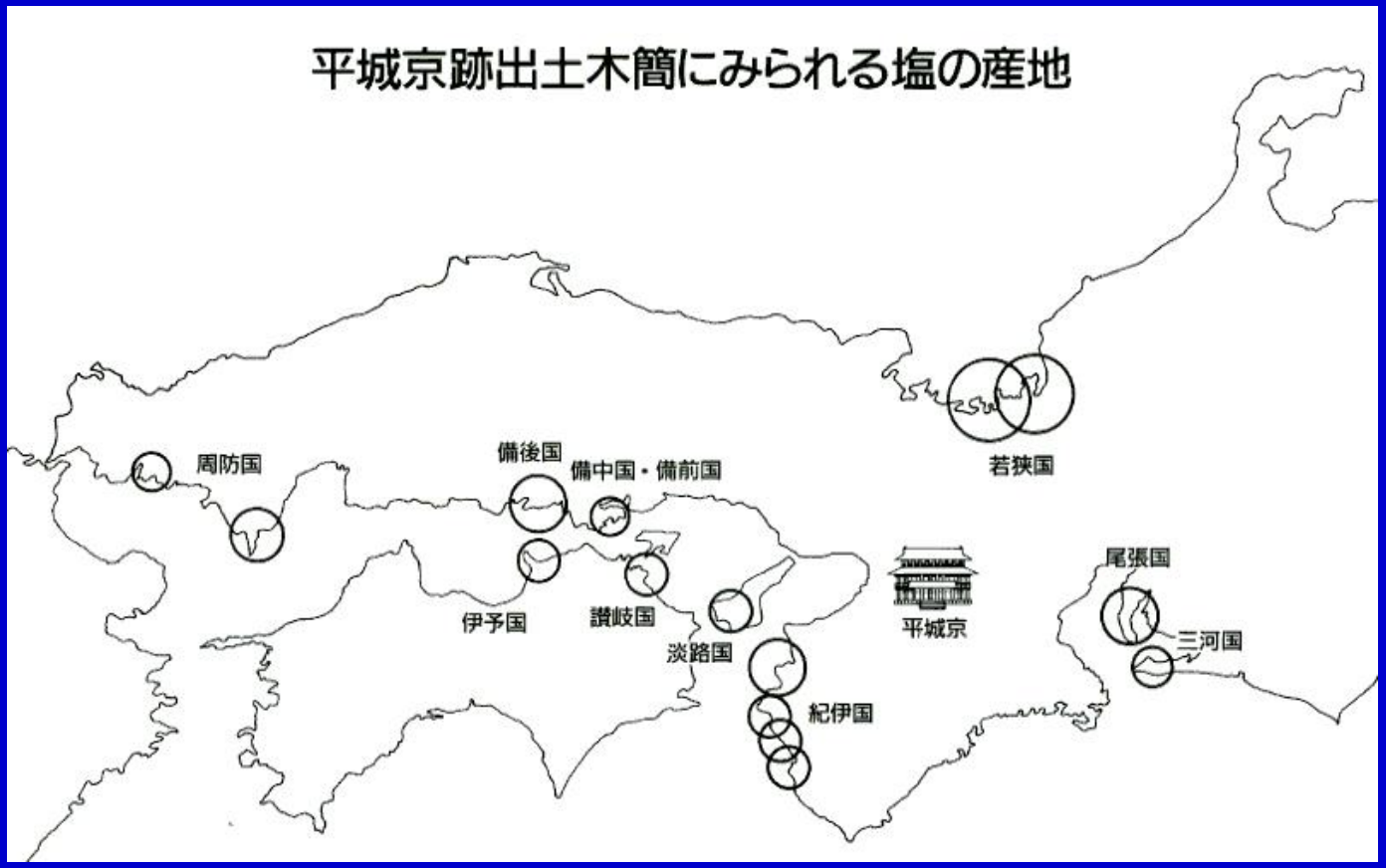
奈良時代

●平城京（奈良の都）へ渥美から塩が運ばれる

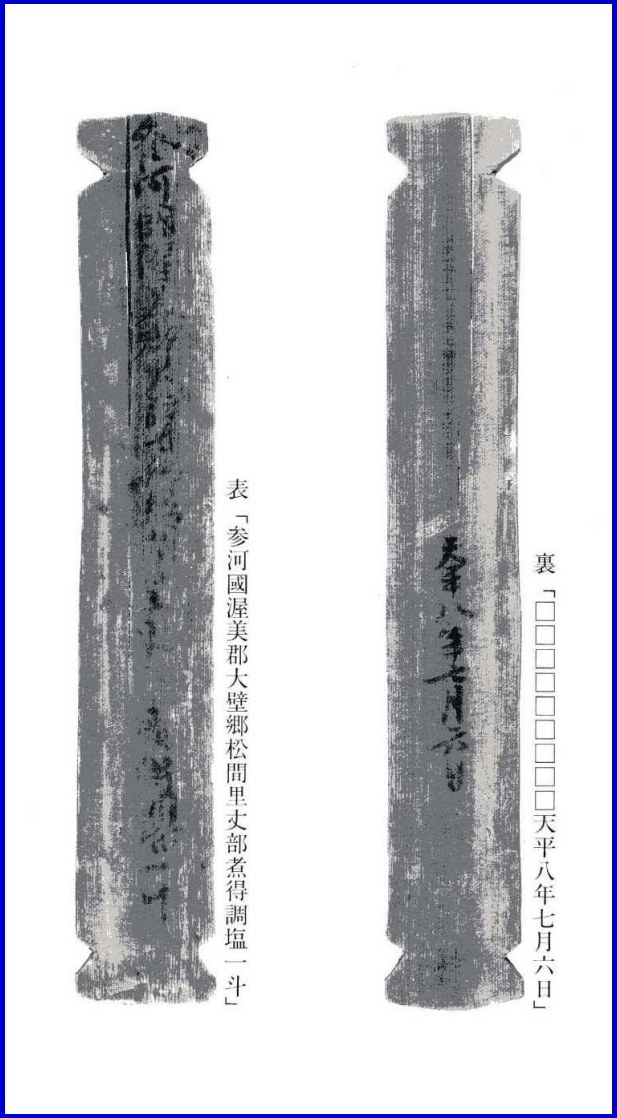
租税（租庸調）制度→塩を都（平城京）へ←荷札木簡

租庸調（律令政治）・平城京 ↑

貢納責任者の本籍（国郡郷里）、名前、納税した塩の量、納税年月日等を記す



●平城京跡出土木簡⇒現在までに6本発見（渥美郡）



表「参河國渥美郡大壁郷松間里丈部煮得調塩一斗」

裏「□□□□□□□□天平八年七月六日」

参河國渥美郡大壁郷松間里丈部煮得調塩一斗」

天平八（七三六）年七月六日

参河國渥美郡大壁郷海部首万呂調塩一斗」

□郡大□郷□□里海部麻呂養老四（七二〇）年庸塩一斗五升」

郷里制 ↑

中世のやきものと渥美古窯

850年前

皿焼１２号窯（発掘時）

皿焼古窯館内部

↑

渥美のやきもの
全国へ

県内の生産地
常滑・瀬戸

・百々陶器窯跡

・大アラコ古窯跡

・皿山古窯群

伊良湖東大寺瓦窯跡

渥美窯の構造略図（『愛知県史』を参考に改変）

渥美窯でのやきもの生産（イメージ）

←源平の戦い・東大寺再建

東大寺軒丸瓦

東大寺軒平瓦

皿焼古窯出土陶製五輪塔

←中世の
やきもの
（陶磁器）
で唯一の
国宝

美術的価値

高度な
生産技術

国宝　秋草文壺　慶応義塾大学蔵（東京国立博物館寄託）

中世の湊

中山湊・青津湊の存在

・渥美古窯製品の流通

→船により全国へ

←当時の海運（物流）

東大寺鎌倉再建瓦

運搬経路（予想）

伊良湖東大寺瓦窯跡→

中山湊→熊野灘→大阪湾→

淀川→木津川→東大寺

伊良湖東大寺瓦窯跡（国指定史跡）

軒丸瓦・軒平瓦

・伊勢神宮領の存在

伊勢神宮と神領地

（神戸・御厨・御園）との往来

↑ 神宮領・荘園

古代（古墳～平安時代）の渥美

万葉の歌碑

阿曇族の流入→アツミの語源？

渥美郡の成立→和銅6年（713）　←なぜ？　渥美（あつみ）

伊勢神宮領の成立→渥美神戸、伊良胡御厨（御厨七郷）ほか

西行の来郡→伊勢から伊良湖へ　←伊勢街道の存在

『万葉集』掲載の歌

←万葉集にも歌が三首
麻績王・柿本人麻呂
歌名所「伊良湖」

『万葉集』巻一　雑歌の部　麻績王の歌

■伊勢国 伊良虞嶋に流さるるの時、人、哀傷して作る歌

「打ち麻を麻績王海人なれや伊良虞の島の玉藻刈ります」

■感傷し和うる歌

「うつせみの命を惜しみ浪にぬれ

伊良虞の島の玉藻刈りをす」

海上より伊良湖岬を望む

（伊勢湾フェリーより撮影）

伊勢神宮領の成立　←神宮領・荘園・国衙領もあった！！

渥美神戸→現在の田原市神戸町付近

伊良胡御厨
　御厨七郷→畠（福江）・保美・中山・亀山・伊良湖・堀切・小塩津

吉胡御厨、田原御厨、勢谷御園、加治御園、新家御厨、

大草御園、根田御厨、院内御園、弥熊御園、上ヶ谷御厨、

浜田御園

＊現在の市内に神戸１箇所、御厨６箇所、御園５箇所

伊良湖神社（伊良久大明神）の創建

伊良湖神社

■貞観１７（８７５）年に創建

＊御衣祭（神御衣神事）のため

御衣祭＝伊勢神宮の神事と関連するお祭り
神御衣と呼ばれる絹布を伊勢神宮
に奉納する

⬇

伊良湖水道（度合）の存在

伊良湖神社（宮山山腹所在）
（渡辺崋山筆「参海雑志」より）

西行法師の来郡　　←西行法師も伊勢から伊良湖へ

西行法師→伊勢から伊良湖へ　　←伊勢街道の存在

■伊良湖で詠んだ歌（『山家集』掲載）

「阿古屋とるいがひの殻を積みおきて宝の跡を見するなりけり」

「伊良胡崎に鰹釣り舟並び浮きてはがちの波に浮かびつつぞ寄る」

「巣鷹渡る伊良胡が崎を疑ひてなほ木に帰る山帰りかな」

「はし鷹のすずろがさでも古るさせて据ゑたる人の有難の世や」

＊江戸時代、松尾芭蕉も鷹の歌を詠む

「鷹一つ見つけてうれし伊良虞崎」（「芭蕉翁之碑」）

中世（鎌倉～戦国時代）の渥美

烏丸資任宝筐印塔

ハマセンダン

和地荘・村松荘→荘園の存在

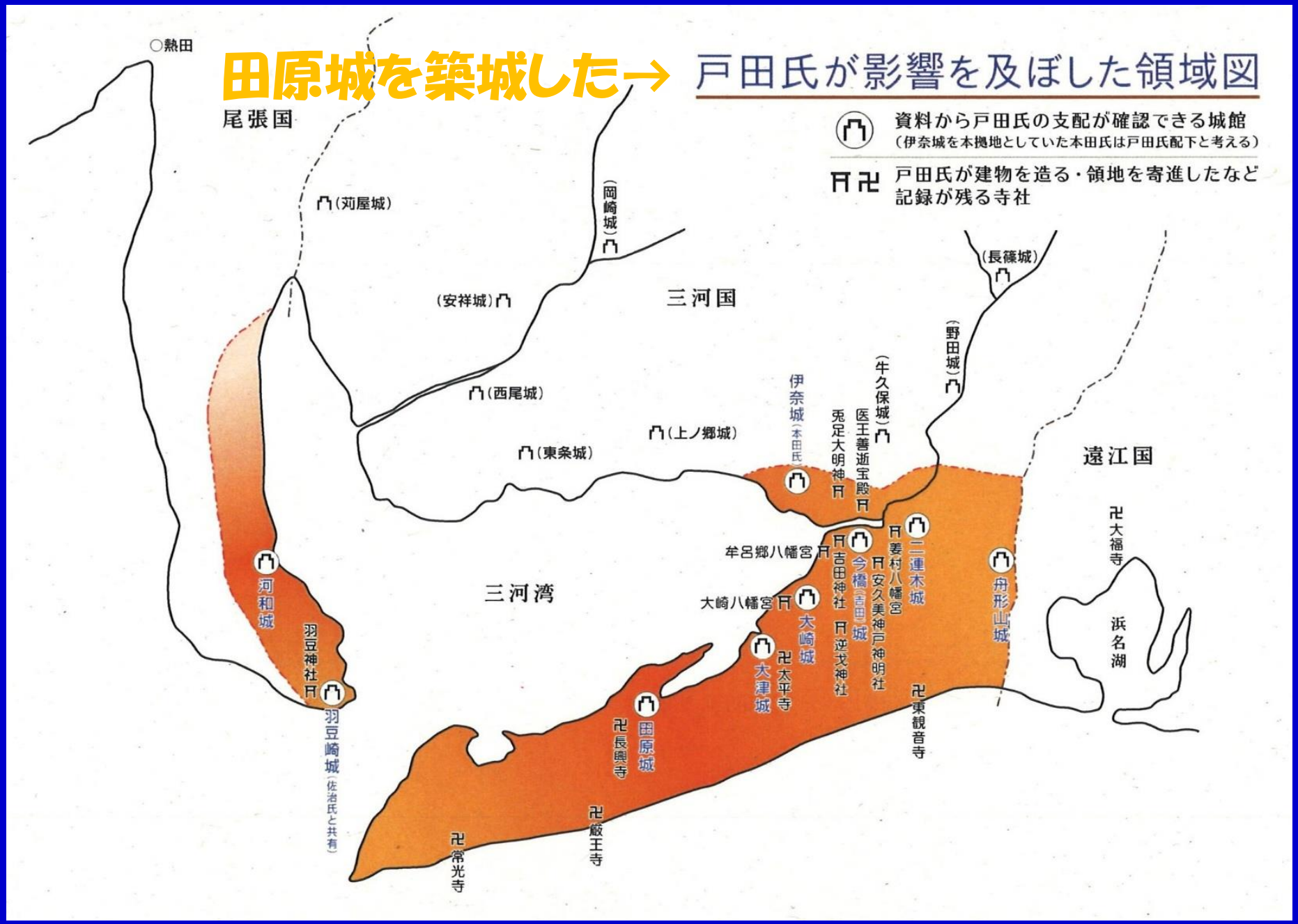
伊勢神宮領（伊良胡御厨）→公卿領

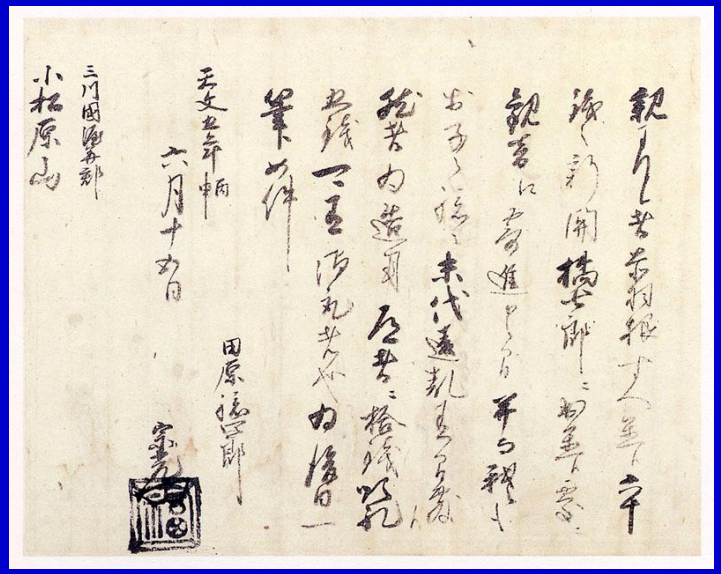
戸田宗光の田原築城（前期戸田）→1480年頃

・烏丸資任（大納言）　←室町幕府8代将軍足利義政の側近
　→豊島池（城屋敷）　**←応仁の乱で領地（保美）へ**

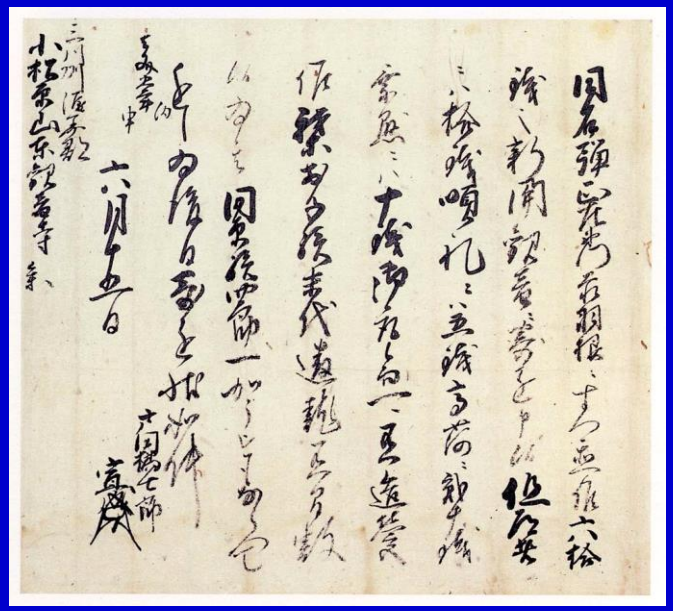
『亀山村古絵図写』（部分）　**←霊山寺（保美町）で出家、逝去**

渥美郷土資料館蔵


田原城を築城した→
戸田氏が影響を及ぼした領域図
資料から戸田氏の支配が確認できる城館
（伊奈城を本拠地としていた本田氏は戸田氏配下と考える）
戸田氏が建物を造る・領地を寄進したなど記録が残る寺社
○熱田
尾張国
（苅屋城）
（岡崎城）
（安祥城）
三河国
（長篠城）
（野田城）
（西尾城）
（牛久保城）
伊奈城（本田氏）
兎足大明神
医王善逝宝殿
（上ノ郷城）
（東条城）
遠江国
牟呂郷八幡宮
姜村八幡宮
二連木城
安久美神戸神明社
今橋（吉田）城
吉田神社
舟形山城
大福寺
三河湾
大崎八幡宮
大崎城
逆戸神社
大津城
太平寺
浜名湖
河和城
羽豆神社
羽豆崎城（佐治氏と共有）
田原城
長興寺
東観音寺
厳王寺
常光寺



戸田宗光寄進状（東観音寺蔵）



戸田宣成寄進状（東観音寺蔵）

田原戸田氏の関銭徴収

赤羽根に関所⇒関銭を徴収

↓

天文5年（1536）

東観音寺造営のための寄進状

重要な交通路（主要街道）の証拠

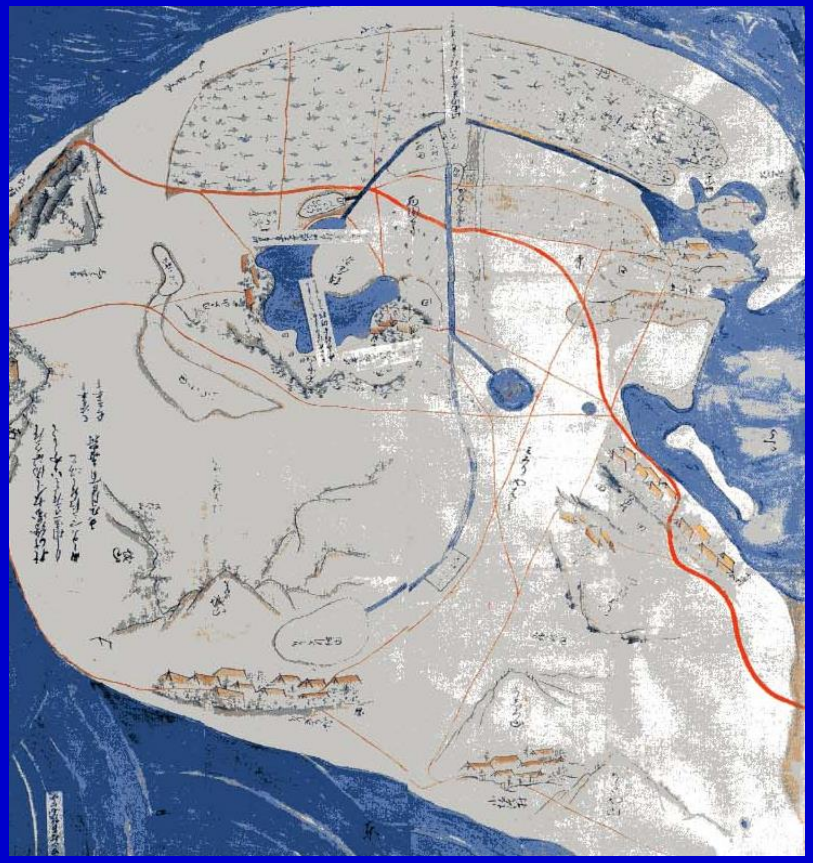
伊勢街道の移動

海岸崩壊の影響→街道の移動

↑ 当時の主要街道

都（京）⇔東国

近世（江戸時代）の渥美

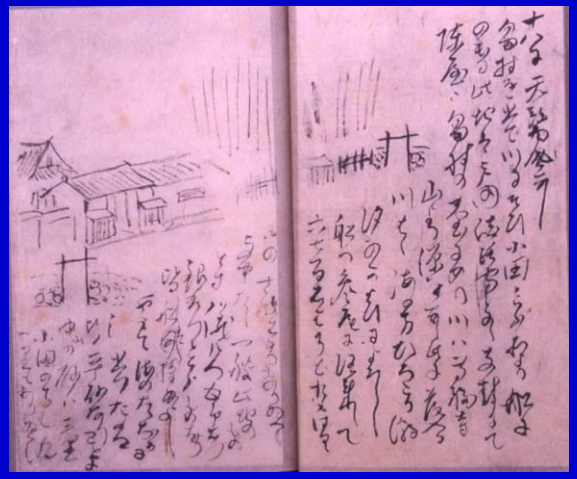


江戸時代初期→49か村

江戸時代後期→51か村

藩領・旗本知行地・天領・寺領

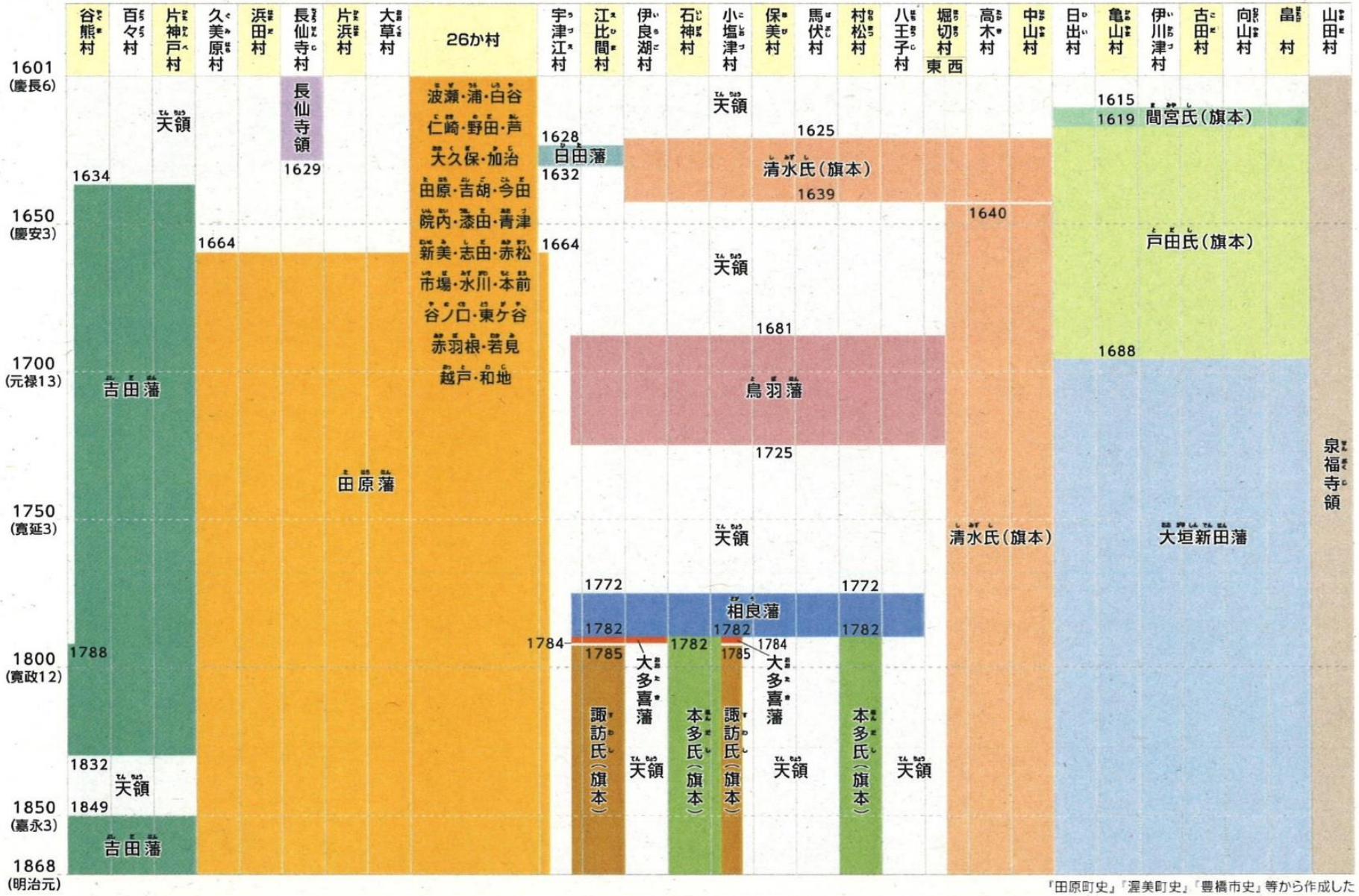
混在



畠村陣屋（『参海雑志』より）

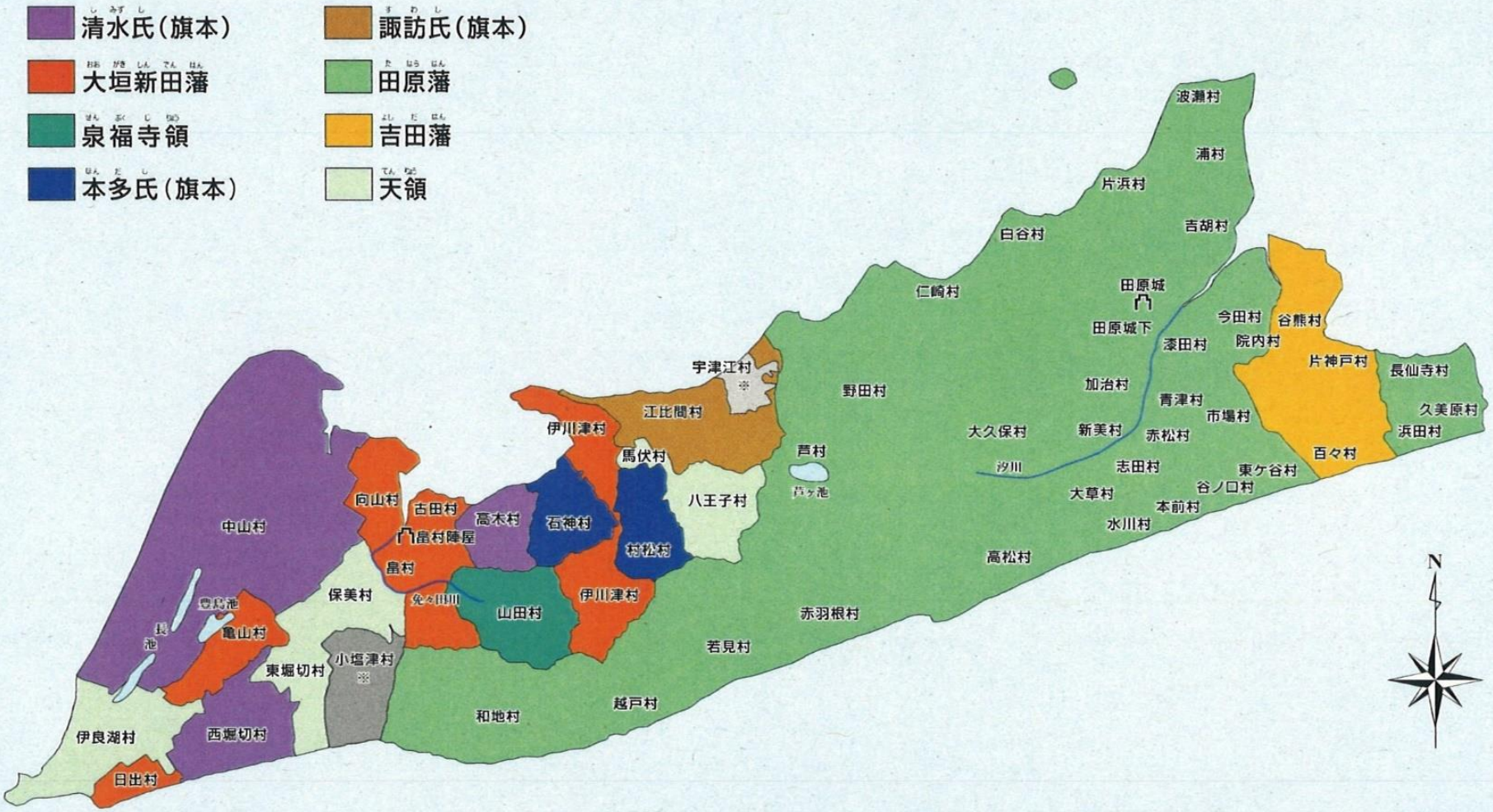
現在の田原市は、支配者 ↑
が村単位でバラバラ

江戸時代の村々と領主支配の移り変わり



『田原町史』『渥美町史』『豊橋市史』等から作成した

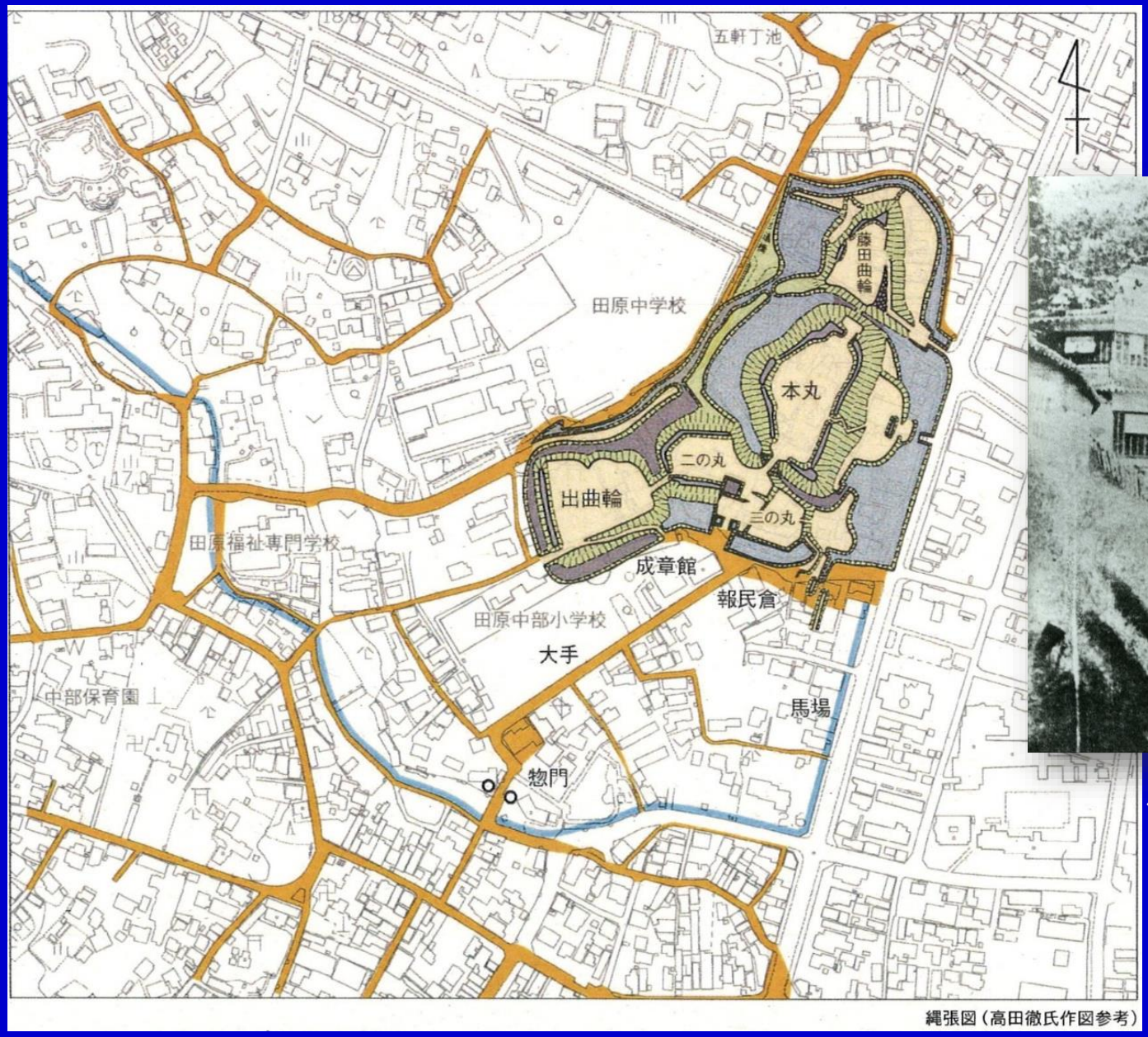
江戸時代末期（1850～1868年）の領主支配図



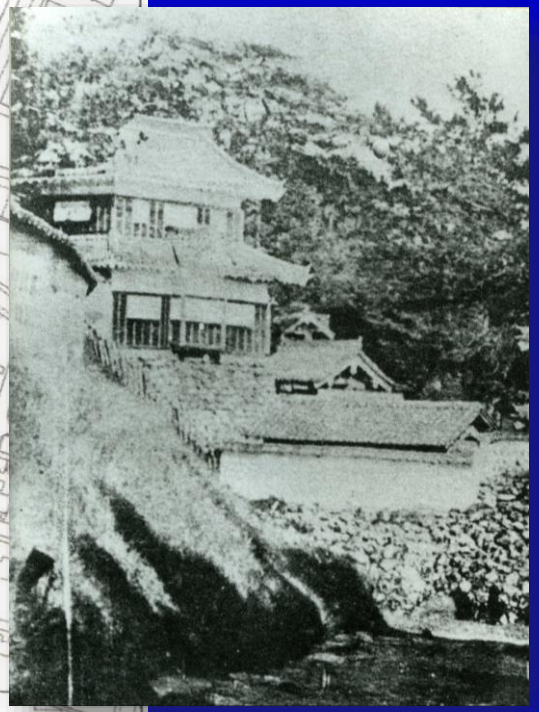
※宇津江村は田原藩・諏訪氏・天領、※小塩津村は諏訪氏・本多氏・天領の3つの勢力に同時に支配されていた（相給）。

『田原町史』『渥美町史』『豊橋市史』等を参照した

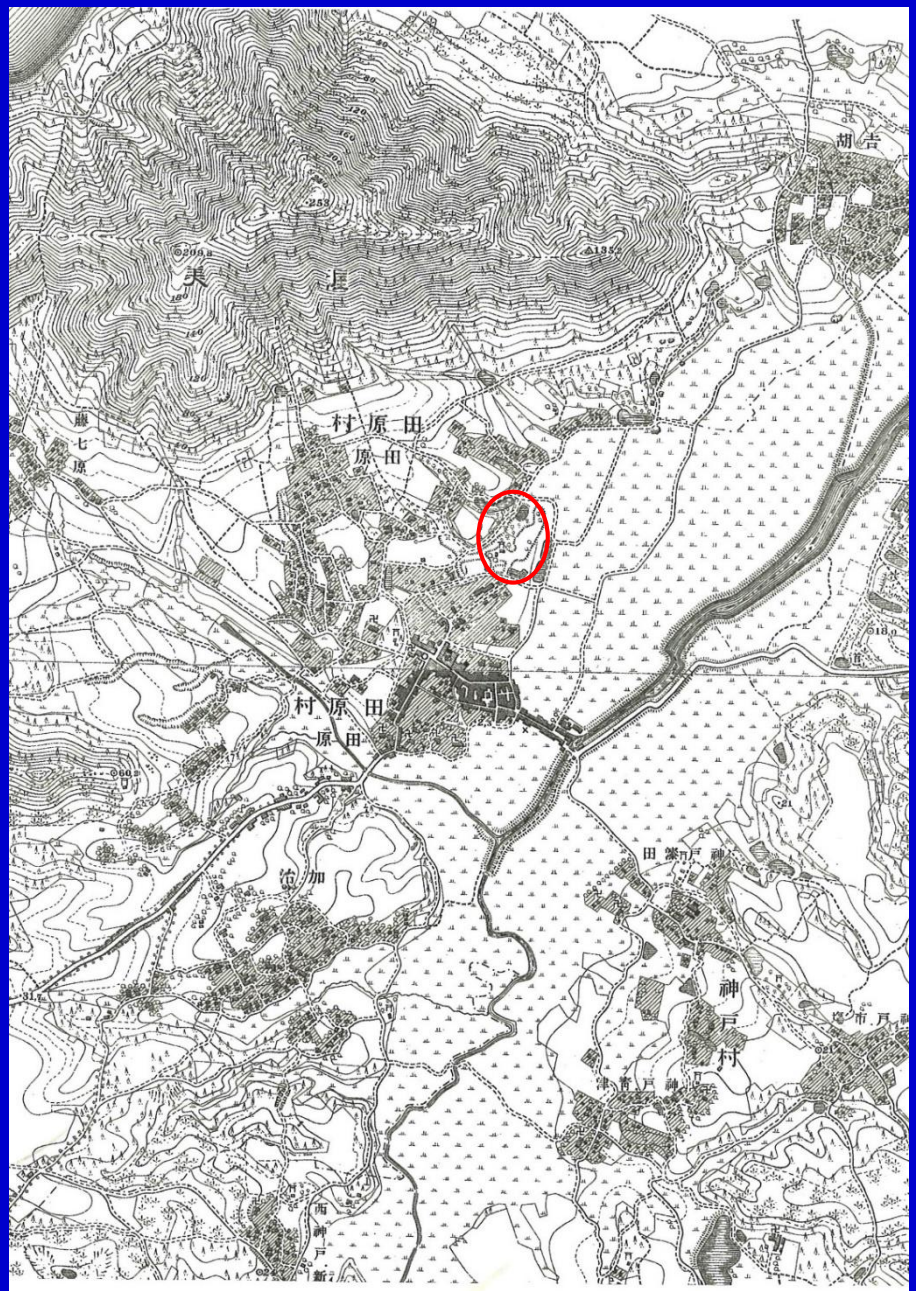
■田原城（田原藩） ←別名：巴江城、1万2千石、親藩



田原城下
縄張図

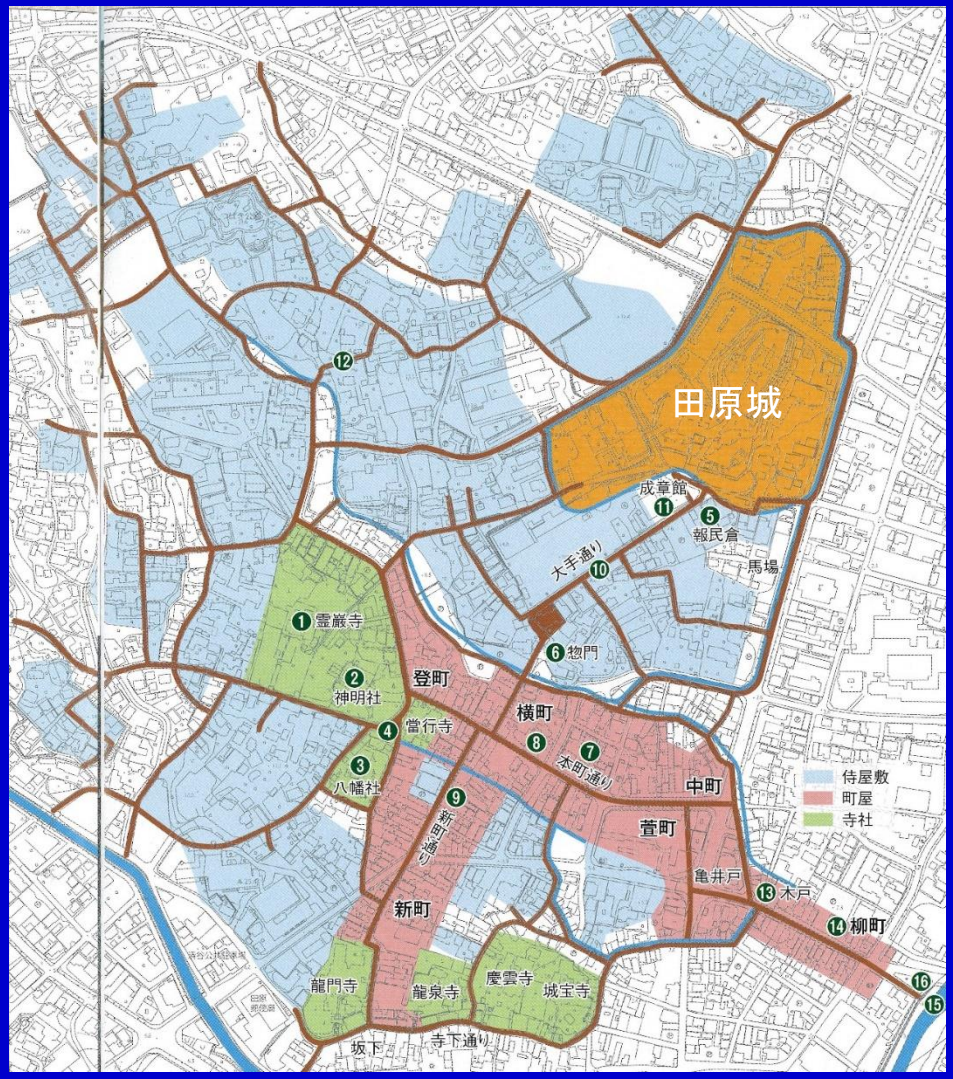


廃藩前の二の丸櫓
明治4年



第17図　明治23年測図の２万分の１地形図「姫嶋」「田原」

（この地形図は、大日本帝国陸地測量部が測図したものを原寸大で使用）



田原城下　町割り図

村々境界墨引絵図

近世の湊

中山湊・畠湊・船倉湊・吉田湊の存在

・年貢米の輸送→御馬湊、平坂湊、吉田湊などで大型船（廻船）へ

・商船の物資輸送→湾内を中心に

「にたり 船」の活躍

まれに志摩半島沖の外洋へ

→永久丸の漂流「漂民聞書」

・その他（船による）の往来

→仕立船・帰り船の利用

地元漁船の使用

廻船への便乗なし

福江港（畠湊）ハガキ

漂民聞書

■芭蕉の来訪と杜国の隠棲

杜国公園

杜国の墓と師弟三吟の句碑

←芭蕉も渥美へ

愛弟子・杜国と芭蕉

芭蕉翁の碑

・芭蕉の来訪

貞享4（1687）年

■漁夫歌人（まじない歌の歌人）　糟谷磯丸　←庶民の味方

磯丸園地

糟谷磯丸肖像画

明和元（1764）年～

嘉永元（1848）年

旧伊良湖神社

『参海雑志』渡辺崋山筆

磯丸霊神祠と糟谷磯丸旧里碑

（伊良湖神社境内内）

磯丸歌選歌碑群（いのりの磯道）

■渡辺崋山

↓ 藩校「成章館」
重文『一掃百態図』
「寺子屋図」

田原市博物館

平成5（1993）年開館

「渡辺崋山肖像画」 椿椿山筆　重要文化財

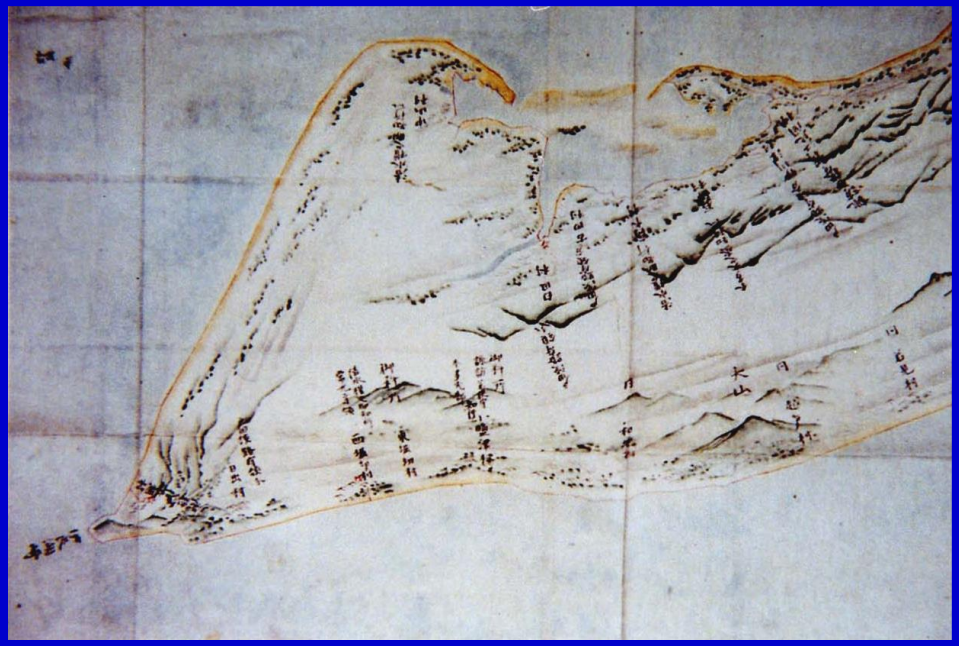
寛政5（1793）～天保12（1841）年

渡辺崋山（田原藩家老）

・政治家→報民倉、遠見番所

・学　者→儒学・蘭学

・画　家→国宝「鷹見泉石像」ほか



伊能忠敬の測量

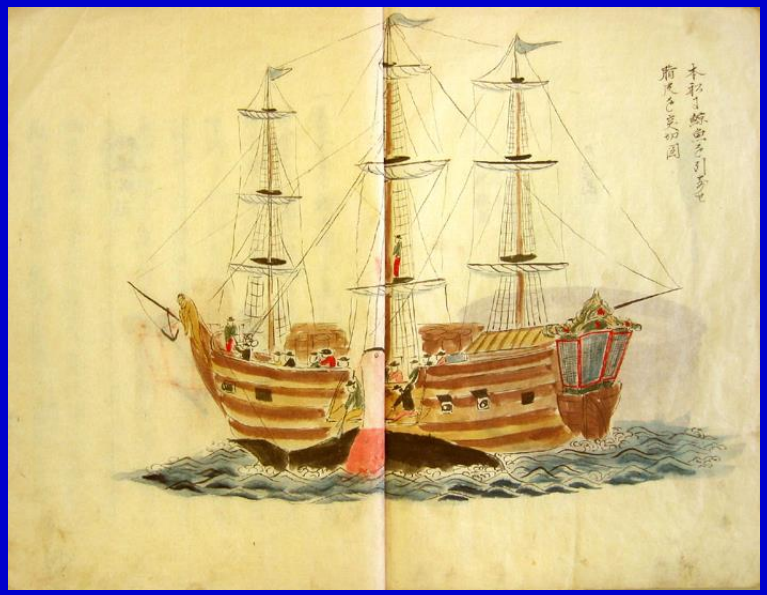
享和3（1803）年

↑ 表浜（太平洋）から内海（三河湾）へ

宿泊場所

（畠村・田原藩内ほか）

↓ 田原のジョン万次郎



『漂民聞書』 全5冊

（永久丸の漂流）

嘉永4（1851）～安政2（1855）年

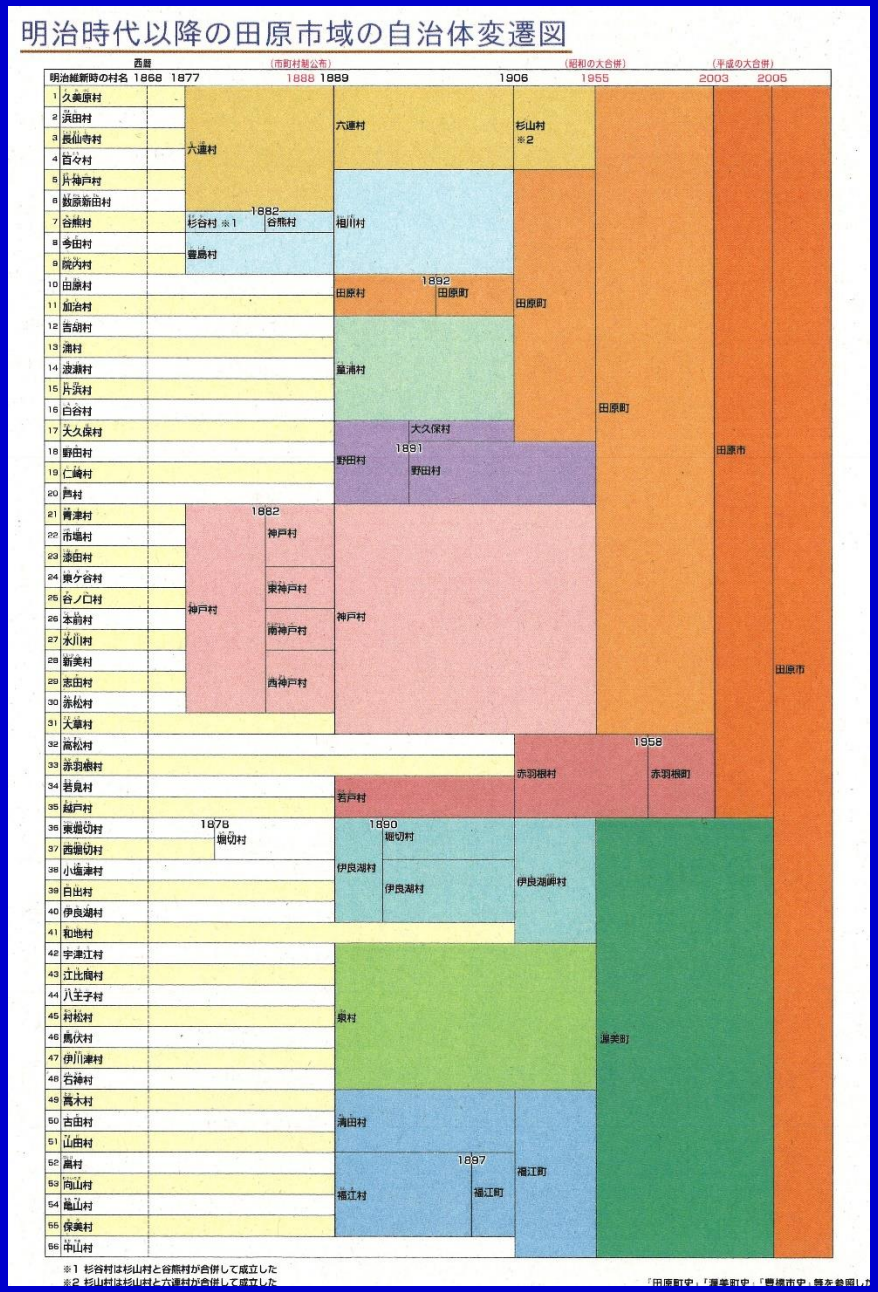
＊鎖国と開国のハザマで発生した漂流事件

■災害（地震・津波）

田原城修理絵図　正徳5（1715）年

西堀切村絵図
（安政の地震浜欠け）

近代（明治～大正時代）の渥美



↓ 現在の田原市へ

明治22年（1889）の合併
- 伊良湖村（翌年、堀切村と伊良湖村に分立）
- 福江村（明治30年町制施行）
- 清田村
- 泉村

明治39年（1906）の広域合併
- 堀切・伊良湖・和地村→伊良湖岬村
- 福江町・中山・清田村→福江町

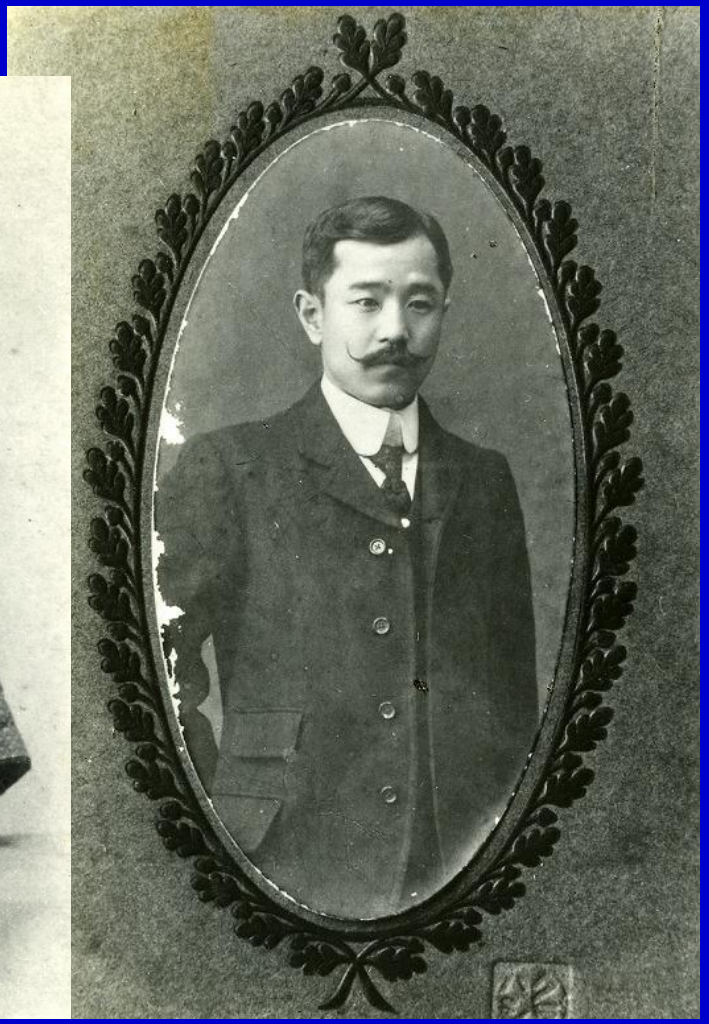
杉山村・田原町・野田村・
神戸村 →昭和30年合併
田原町誕生

赤羽根村 →昭和33年町制
赤羽根町誕生

伊良湖岬村・福江町・泉村→昭和30年合併
渥美町誕生

■渥美半島が生んだ挿絵画家　宮川春汀

「椰子の実」誕生の立役者 ↑



挿絵画家宮川春汀の活躍

明治30（1897）年３月「風俗画報　第137号」に表紙絵
“桜下美人の図”掲載

↓

明治35（1902）年７月「風俗画報　第253号」で挿絵終了

「風俗画報　第137号」
明治30年“桜下美人の図”

「風俗画報　第150号」
明治30年“月見の図”

「風俗画報　第253号」
明治35年“入谷帰り不忍池畔”

宮川春汀の挿画活動

明治25（1892）年５月～大正３（1914）年１月

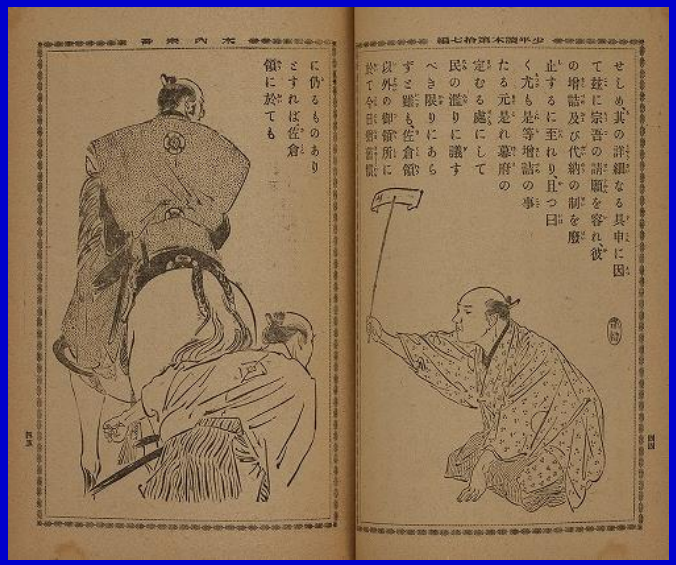
東陽堂「風俗画報」　　博文館「文藝倶楽部」

↓

明治29（1896）年～明治33（1900）年は、錦絵界に進出

明治32（1899）年12月～

→博文館「少年読本第17編　木内宗吾」「世界歴史譚」「日本歴史譚」「幼年画報」「少年世界」「少女世界」等の挿絵担当



「少年読本第十七編　木内宗吾」

「日本歴史譚」

「世界歴史譚」

明治36（1903）年～

→金港堂「文芸界」の表紙・口絵担当

ほか、青木嵩山堂・隆文館の表紙・木版口絵も担当

明治37（1904）年２月

日露戦争勃発→博文館田山花袋を主任とし、画家

寺崎広業や写真技師柴田常吉等派遣

↓

春汀⇒博文館『日露戦争写真画報』「アリス嬢の日光山探勝」等

金港堂『日露戦争写真帖』「露砲兵の敗走」　掲載

「アリス嬢の日光山探勝」

「露砲兵の敗走」

明治38（1905）年～大正３（1914）年１月

→博文館「文藝倶楽部」に毎号挿絵掲載

↓

明治38年８月、師富岡永洗病没⇒武内桂舟の桂影社に移籍

博文館

明治20（1887）年、大橋佐平により創立、大橋乙羽（渡部又太郎）

明治～昭和にかけて日本の出版界をリード

代表雑誌＝「太陽」（明治28年創刊）、巌谷小波編集「少年世界」「中学世界」、「文藝倶楽部」（明治28年創刊）、田山花袋編集「文章世界」（明治29年創刊）等

「文藝倶楽部」

第11巻第７号 明治38年

第19巻第５号　大正２年

田山花袋←田山花袋も伊良湖に！！若き文人たちとの交流

明治４（1871）年、群馬県館林市生まれ
↓
本名録彌

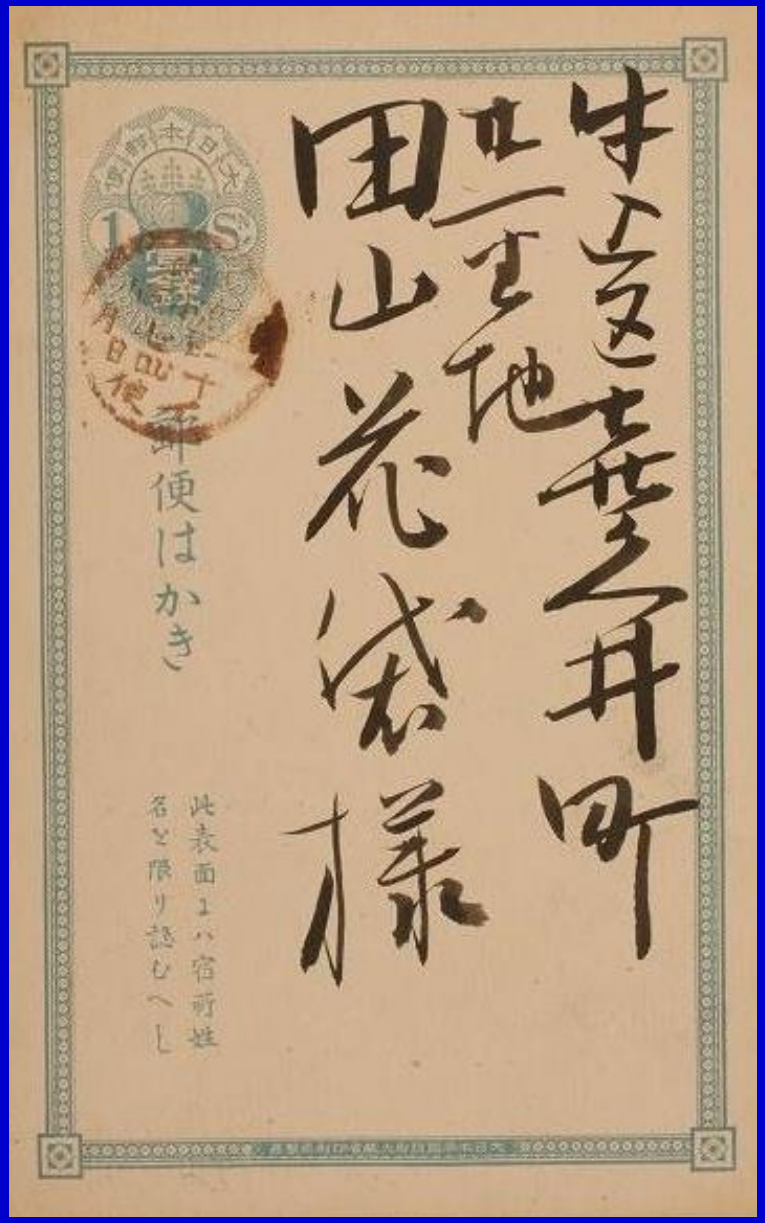
明治・大正の文学を代表する作家の一人
上京し最初、松浦辰男の和歌の塾に学び、「紅葉会」にて松岡國男や太田玉茗と交友関係を結ぶ
明治30年、新体詩集「抒情詩」発表
→春汀は、太田玉茗等を通じて花袋たちと交流し、故郷伊良湖を紹介

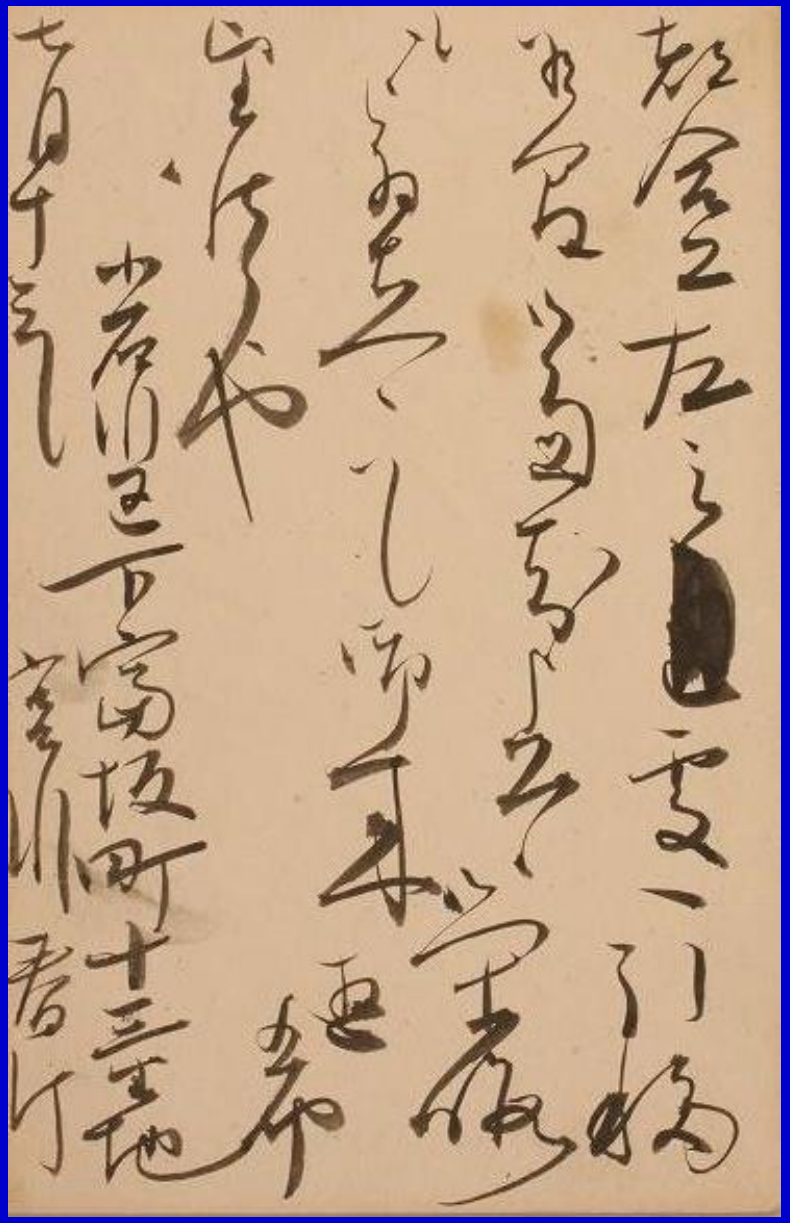
明治31（1898）年、先に伊良湖を訪れていた松岡國男を追って伊良湖来訪→伊良湖で再会した２人は、福江港から知多半島に船で渡り、
名古屋からは、汽車で三重県一身田にいた太田玉茗を訪問

紀行文「伊良湖半島」明治31年　執筆

明治32年、太田玉茗の妹「利佐」と結婚←春汀はお祝いに扇子を贈る

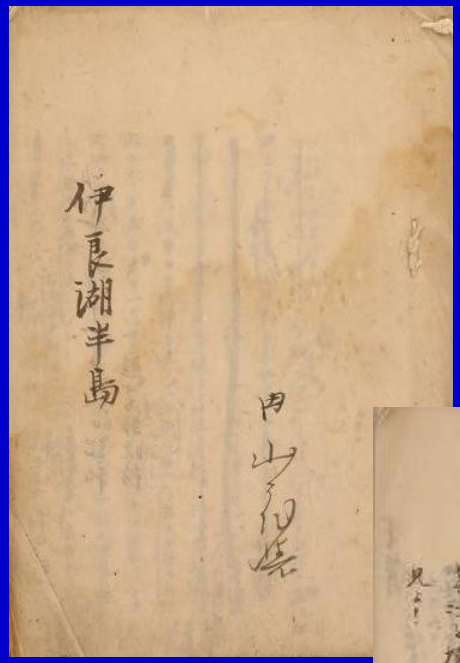
大正10（1921）年１月７日、長男先蔵・次男瑞穂を連れて伊良湖を再訪し、翌８日福江（角上旅館）に宿泊後、知多半島へ



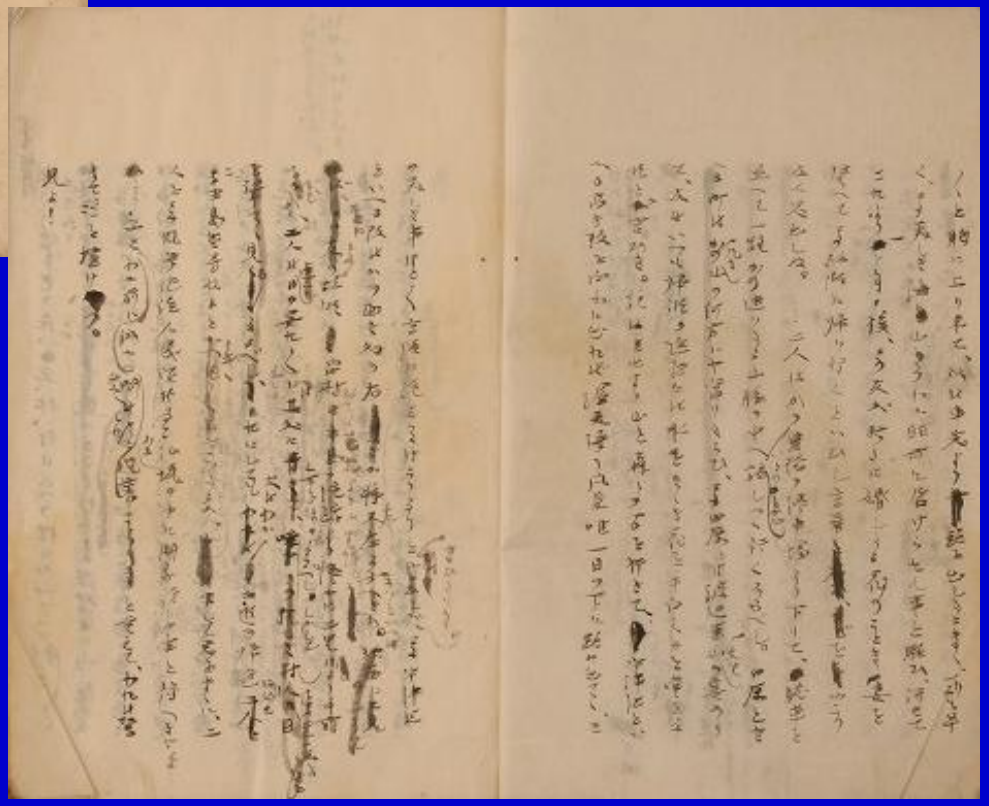


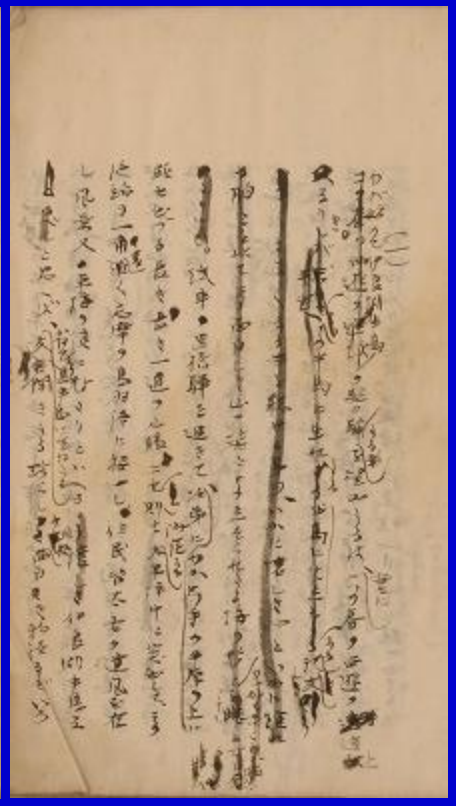
都合上左之處へ引移候間御通知申上候
御閑暇も被為在候ハヽ御来遊希望仕候や
小石川区下富坂町十三番地　宮川春汀
七月十三日

田山花袋宛宮川春汀はがき
明治31（1898）年7月13日付



←「伊良湖」大好き！！





田山花袋筆「伊良湖半島」（自筆原稿）　明治31（1898）年

松岡（柳田）國男

若き文人たちとの交流

明治８（1875）年、兵庫県福崎町生まれ
↓
民俗学者、日本民俗学の父（当初は歌人、政治学者）
上京し最初、松浦辰男の和歌の塾に学び、「紅葉会」にて田山花袋や太田玉茗と交友関係を結ぶ
明治30年、新体詩集「抒情詩」発表
→春汀は、太田玉茗等を通じて國男たちと交流し、故郷伊良湖を紹介

明治31（1898）年夏、伊良湖来訪
→網元小久保惣三郎の離れ座敷に逗留（約２ヶ月）し、渥美半島や神島の風俗習慣などを見聞←伊良湖は柳田民俗学の初発の地

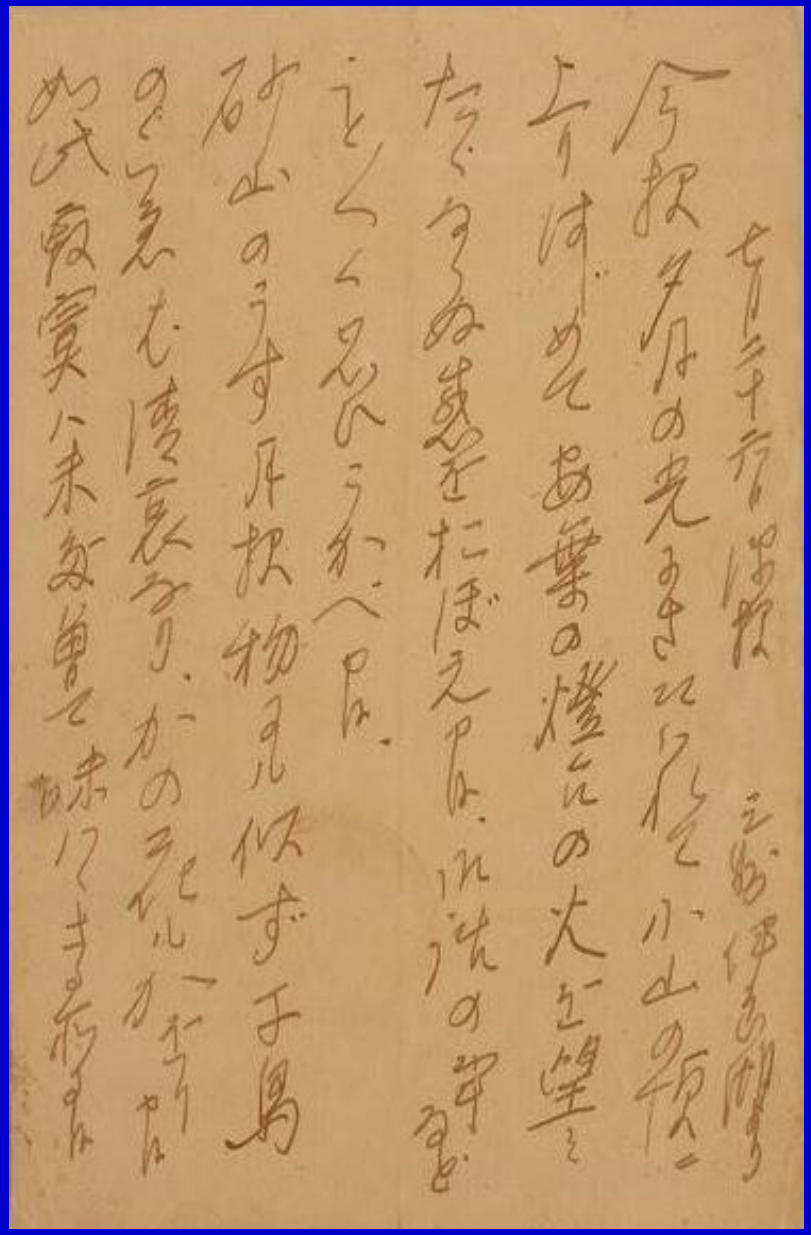
明治34（1901）年、長野県飯田市の柳田家へ養嗣子、以後は柳田姓

紀行文「遊海島記」明治35年　執筆・発表
→伊良湖滞在中の様々な体験等が記述
恋路ヶ浜にて椰子の実発見←島崎藤村の抒情詩「椰子の実」誕生のきっかけ
↓
『海上の道』昭和36（1961）年←柳田民俗学の集大成

「遊海島記」　柳田國男著　明治35（1902）年

　岬の絶端の山を小山という。小山の東面は松の林にて、静かなる処なり。大洋の風常に通いて涼しければ、折々その奥に入りて書を読むに、兎多く群遊びて、はなはだ人を恐れず、円なる目をして此方を見るも興あり。干潮の時は、この松原より小山の裾を廻りて、右の入海の方へ向うべし。神島の正面よりいささか外海に片寄りて、大なる巖多く海に連なれり。

　小山の松林より東、外海の岸は、昔より恋路が海、玉章の磯などいう。何のゆえとも知らず。濤高く飛沫霧と立ちて、物凄じき荒磯なり。打ち向う海は大灘の果てもなく、沖を走る大船は目よりも高く、仰ぎて見るようなる心地す。この渚伝いに歩めば、心の留まるもの多し。ある時は釣竿の長きに、糸の半ば附きたるを拾いぬ。また大いなる豆のようなるものを拾い上げて里人に問えば、藻玉とて海草の実なりと答えぬ。嵐の次の日に行きしに、椰子の実一つ漂い寄りたり。打ち破りて見れば、梢を離れて久しからざるにや、白く生々としたるに、坐に南の島恋しくなりぬ。

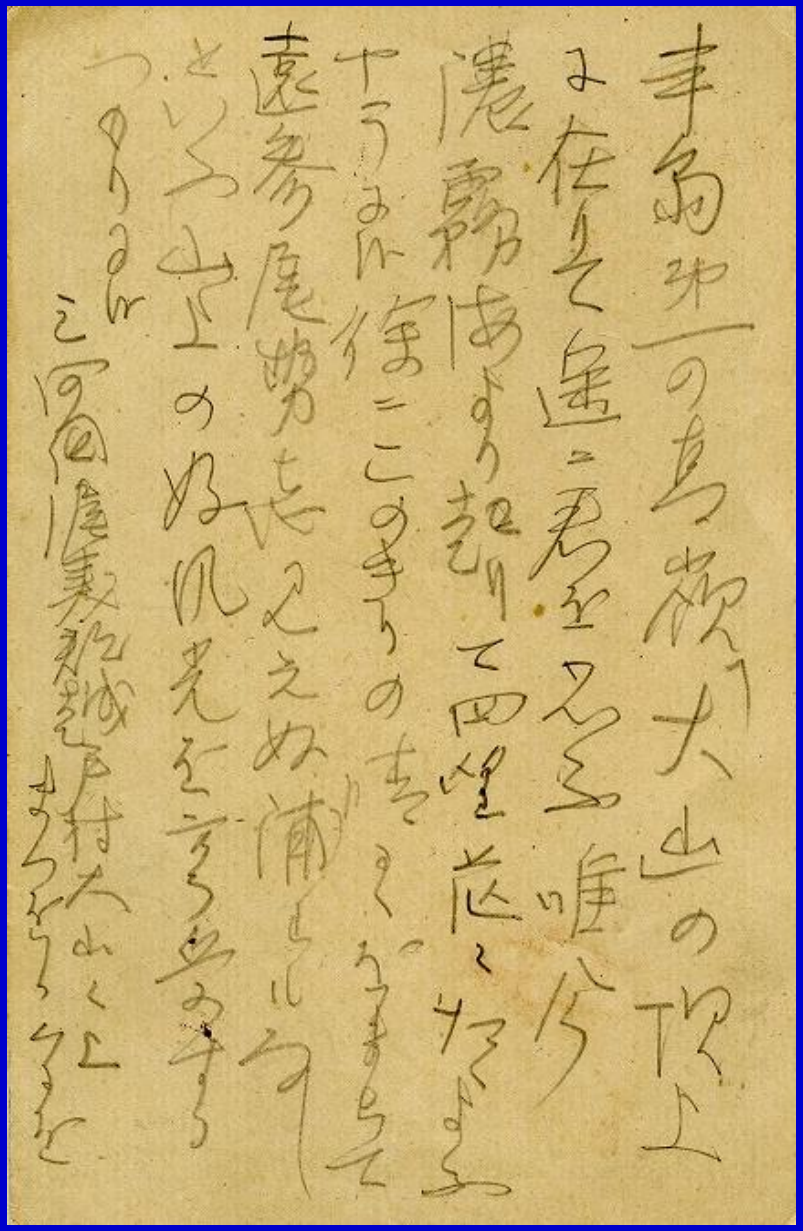


七月二十六日深夜　三州伊良湖より
今夜夕月の光にさそハれて小山の頂ニ
上りはじめて安乗の灯台の火を望ミ
たゞならぬ感をおぼえ申候、御話の事など
ことごとく思いうかべ申候、
砂山のうす月夜物にも似ず千鳥
のこゑ尤清哀なり、かの花もかをり申候
如此寂寞ハ未だ曽て味ハゝさる所に候

田山花袋宛松岡（柳田）國男はがき
明治31（1898）年7月27日付

半島第一の高嶺「大山」の頂上
に在りて遙ニ君を思ふ唯今
濃霧海より起りて四望茫々たゝよふ
やうに候徐ニこのきりの晴るゝをまちて
遠参尾勢志見えぬ浦里もなし
といふ山上の好風光を享受する
つもりに候

三河国渥美郡越戸村大山々上
まつをか　くにを



田山花袋宛松岡（柳田）國男はがき
明治31（1898）年8月9日付

島崎藤村←伊良湖に来なかった文人　若き文人たちとの交流

明治５（1872）年、長野県馬籠生まれ

↓

詩人・小説家

明治29年頃から田山花袋・松岡（柳田）國男・太田玉茗と交流

明治33（1900）年６月

抒情詩「椰子の実」発表（雑誌『新小説５号８巻』）

→『落梅集』（明治34年）収録

＊昭和11（1936）年→大中寅二作曲（NHK国民歌謡）

<u>椰子の実誕生　秘話</u>

昭和27（1952）年

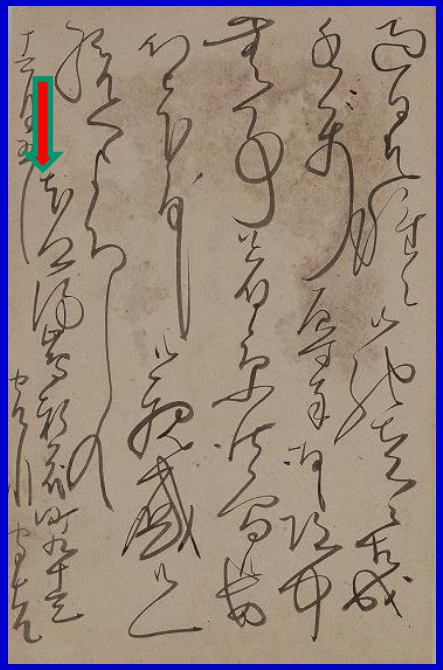
→柳田國男「海辺の道」（後の『海上の道』）に椰子の実誕生の秘話を記載

昭和31（1956）年８月

→ラジオ東京「朝の談話室」にて秘話公開

昭和36年９月８日

→伊良湖岬に「椰子の実」詩碑建立



宮川春汀はがき
明治30年12月６日付
島崎藤村と同住所

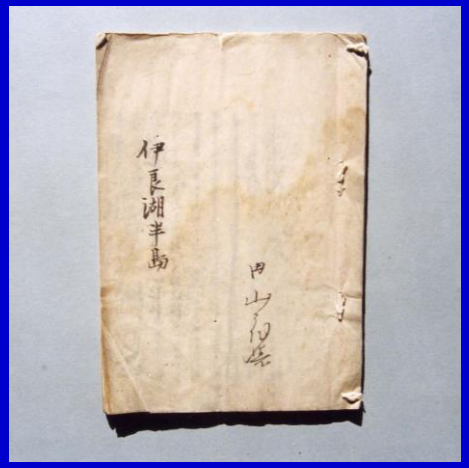
本郷湯島新花町九十三

「海上の道」　柳田國男著　昭和36（1961）年

　途方もなく古い話だが、私は明治三十年の夏、まだ大学の二年生の休みに、三河の伊良湖崎の突端に一月余り遊んでいて、このいわゆるあゆの風の経験をしたことがある。この村はその後ほどなく、陸軍の大砲実験場に取り上げられて、東の外海の海岸に移されてしまったが、もとは伊勢湾の入り口に面して、神宮との因縁も深く、昔なつかしい形勝の地であった。村の中央には明神さまの御社と清い泉とがあって村の人の渇仰を集め、それに養われたと言われる無筆の歌人、漁夫磯丸の旧宅と石の祠とは、ちょうど私の本を読む窓と相対していた。毎朝旱天の日課には、村を南へ出てわずかな砂丘を横ぎり、岬のとっさきの小山という魚附林を一周して来ることにしていたが、そこにはさまざまの寄物の、立ち止まってじっと見ずにはおられぬものが多かった。

　今でも明らかに記憶するのは、この小山の裾を東へまわって、東おもての小松原の外に、舟の出入りにはあまり使われない四五町ほどの砂浜が、東やや南に面して開けていたが、そこには風のやや強かった次の朝などに、椰子の実の流れ寄っていたのを、三度まで見たことがある。・・・・・中略・・・・・。この話を東京に還って来て、島崎藤村君にしたことが私にはよい記念である。今でも多くの若い人たちに愛唱せられている「椰子の実」の歌というのは、多分は同じ年のうちの製作であり、あれを貰いましたよと、自分でも言われたことがある。

宮川春汀錦絵



「伊良湖半島」

田山花袋筆

柳田國男逗留の地碑

椰子の実記念碑

現代（昭和～平成時代）の渥美

〔旧渥美町域中心の場合〕

←近藤寿市郎（高松町出身）

昭和28（1953）年　十三号台風来襲

昭和30年4月15日　渥美町誕生

昭和34（1959）年　伊勢湾台風来襲

昭和43（1968）年　豊川用水通水

昭和46年　中部電力渥美火力1・2号機運転開始

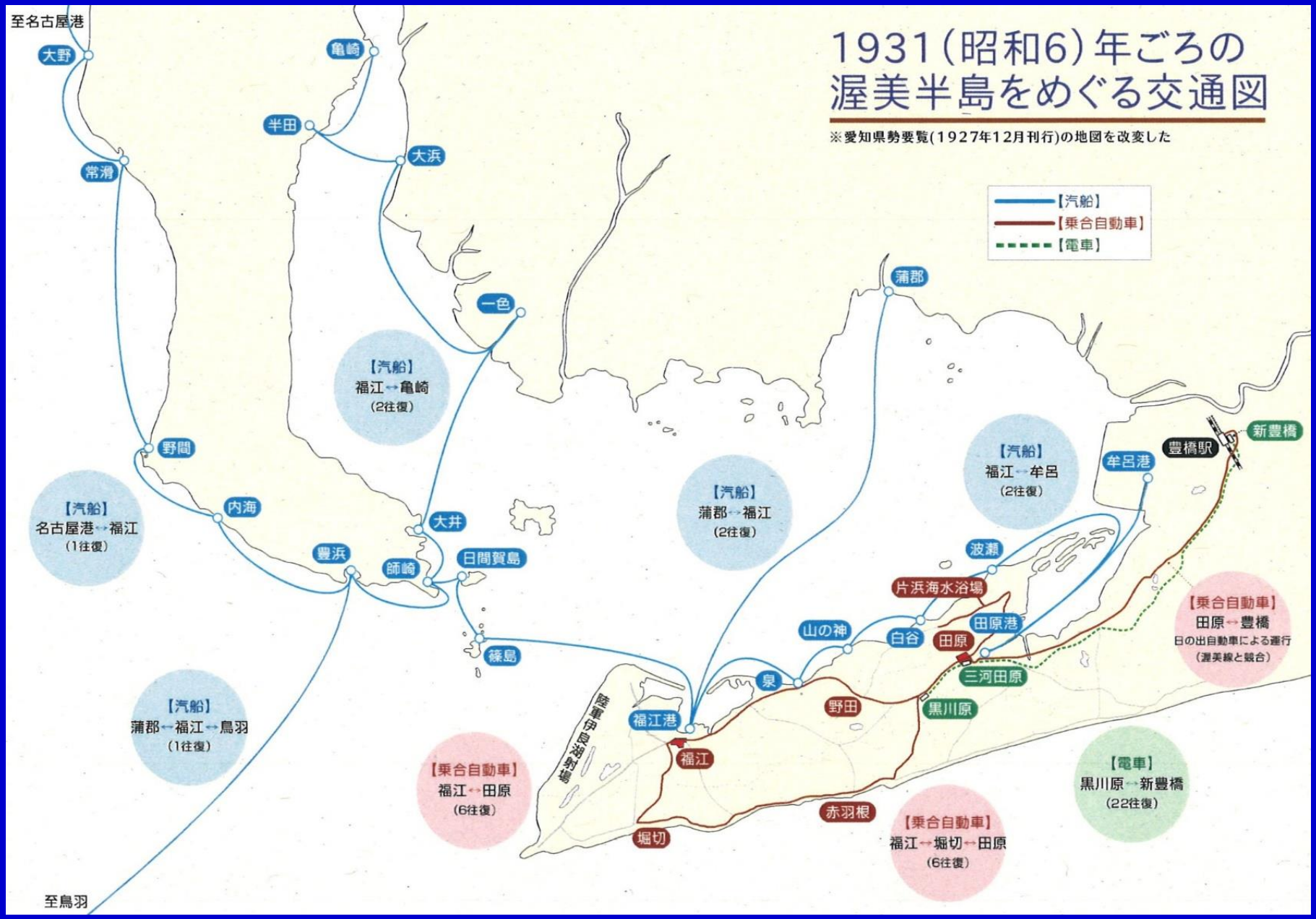
昭和56年　中部電力渥美火力3・4号機運転開始

昭和59（1984）年　渥美町郷土資料館開館

平成　5（1993）年　田原町博物館開館

平成17（2005）年10月1日　新生「田原市」誕生

■渥美半島交通図（昭和初期）　←上村杢左衛門（福江町）



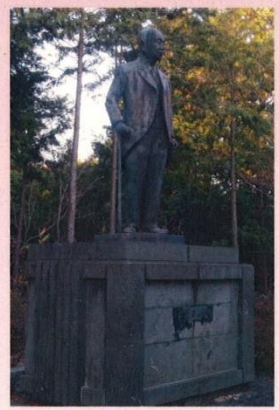
■渥美半島の農工業の一大転換期　豊川用水の通水

豊川用水の構想者

近藤 寿市郎
（1870～1960）

高松町の名主を務めた家に生まれましたが、政治を志して豊橋市に移り住み、愛知県議会議員、衆議院議員、豊橋市長などを務めました。

1921（大正10）年に当時オランダの植民地であったインドネシアを視察中、谷川から大規模に取水して高い場所にある棚田をうるおす光景を目にしたことから、渥美半島を含む東三河に用水路を通すことを考えついたといいます。



近藤寿市郎銅像
（豊橋市赤岩山中）

近藤を慕う有志たちによって最晩年の1960（昭和35）年に建設されたもの

○ このほかに近藤寿市郎が発案したもの

（1）赤羽根町に漁港兼悪天候時に退避するための港を建設すること
（2）豊橋市を中心とした三河湾沿岸に大規模な港を作り、港と浜松市との間に運河を掘って両市を結ぶこと

その計画のあまりの壮大さに、当時は豊川用水計画とあわせて「近寿の三大ホラ」と言われましたが、現在からみればこれらは形を変えつつも全て実現しており、その先見性には驚くばかりです。

地引き網漁と
イモ・麦の農業

藤城信幸氏作成「近藤寿市郎と豊川用水」PPt
より転用

タタキ（高松一色）

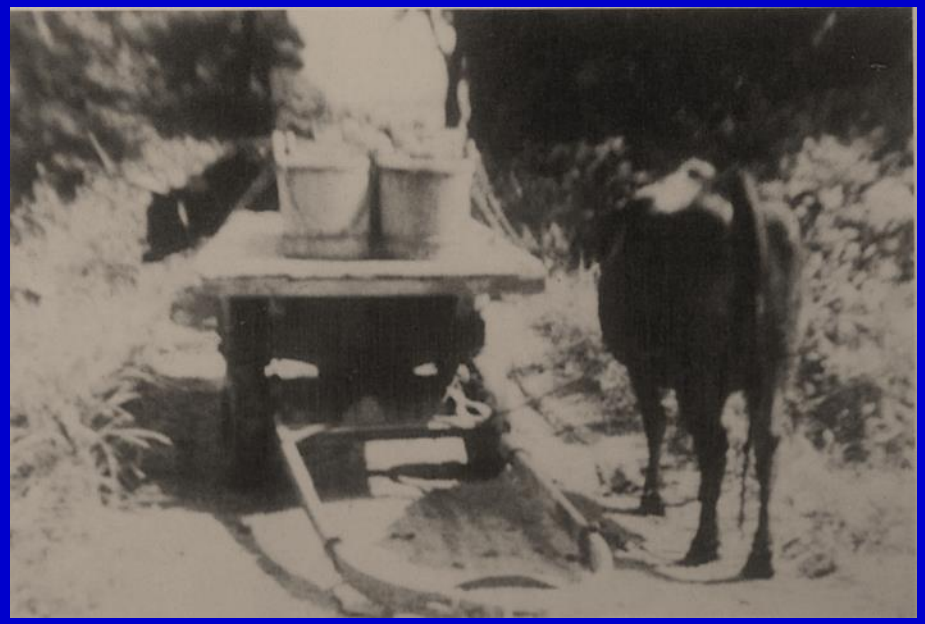
渥美半島は温暖な気候に恵まれながらも、慢性的な水不足に苦しんできた

水の乏しいやせた赤土の台地が広がる赤羽根町や田原町の太平洋岸では、昭和30年代まで、地引き網漁とイモ・麦の農業を行う半農半漁の集落が連なっていた。

これらの台地上の集落は、生活用水の多くをタタキに貯めた雨水に依存する等、水不足に悩まされていた。

藤城信幸氏作成「近藤寿市郎と豊川用水」PPtより転用

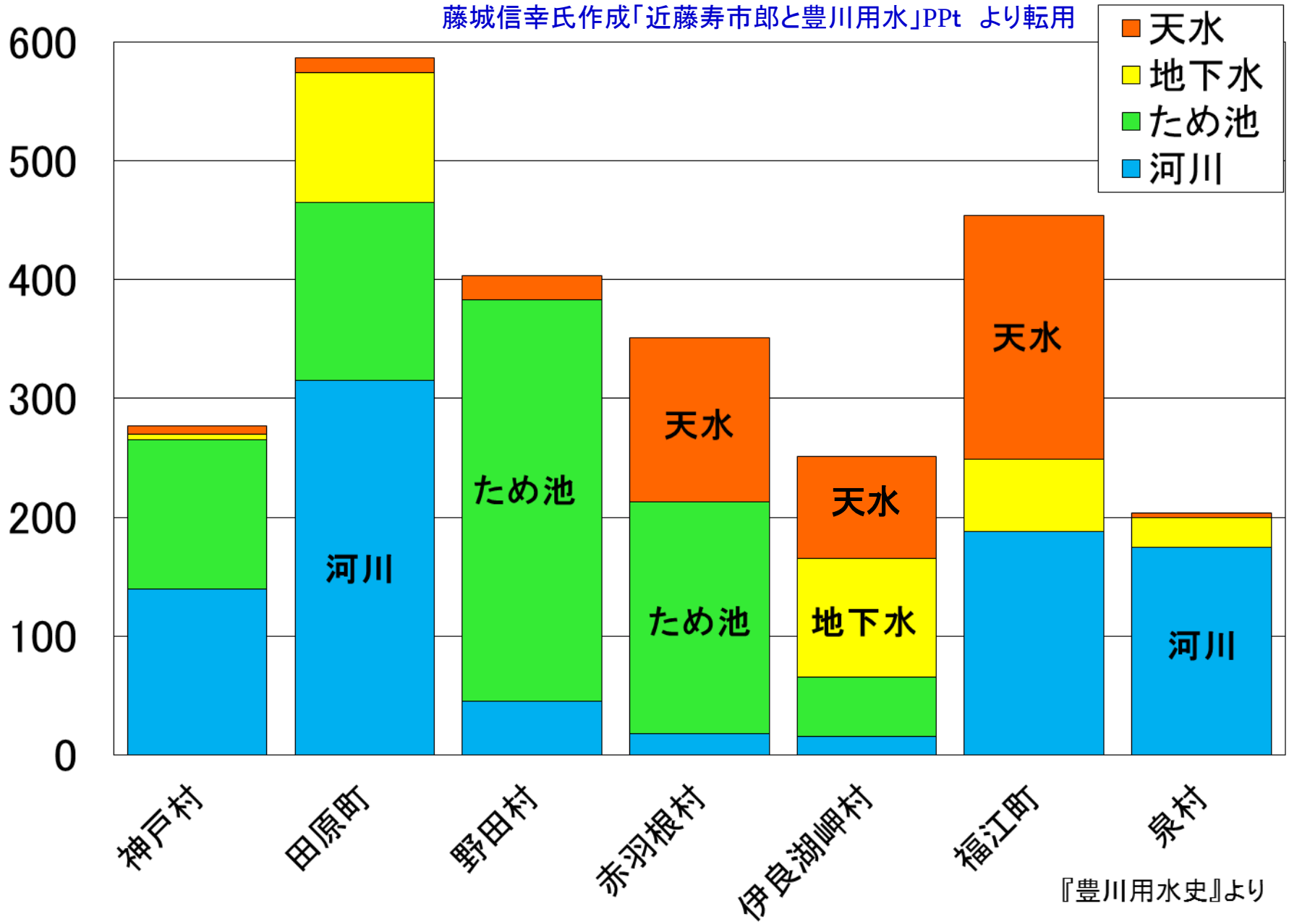
桶を担って水の運搬



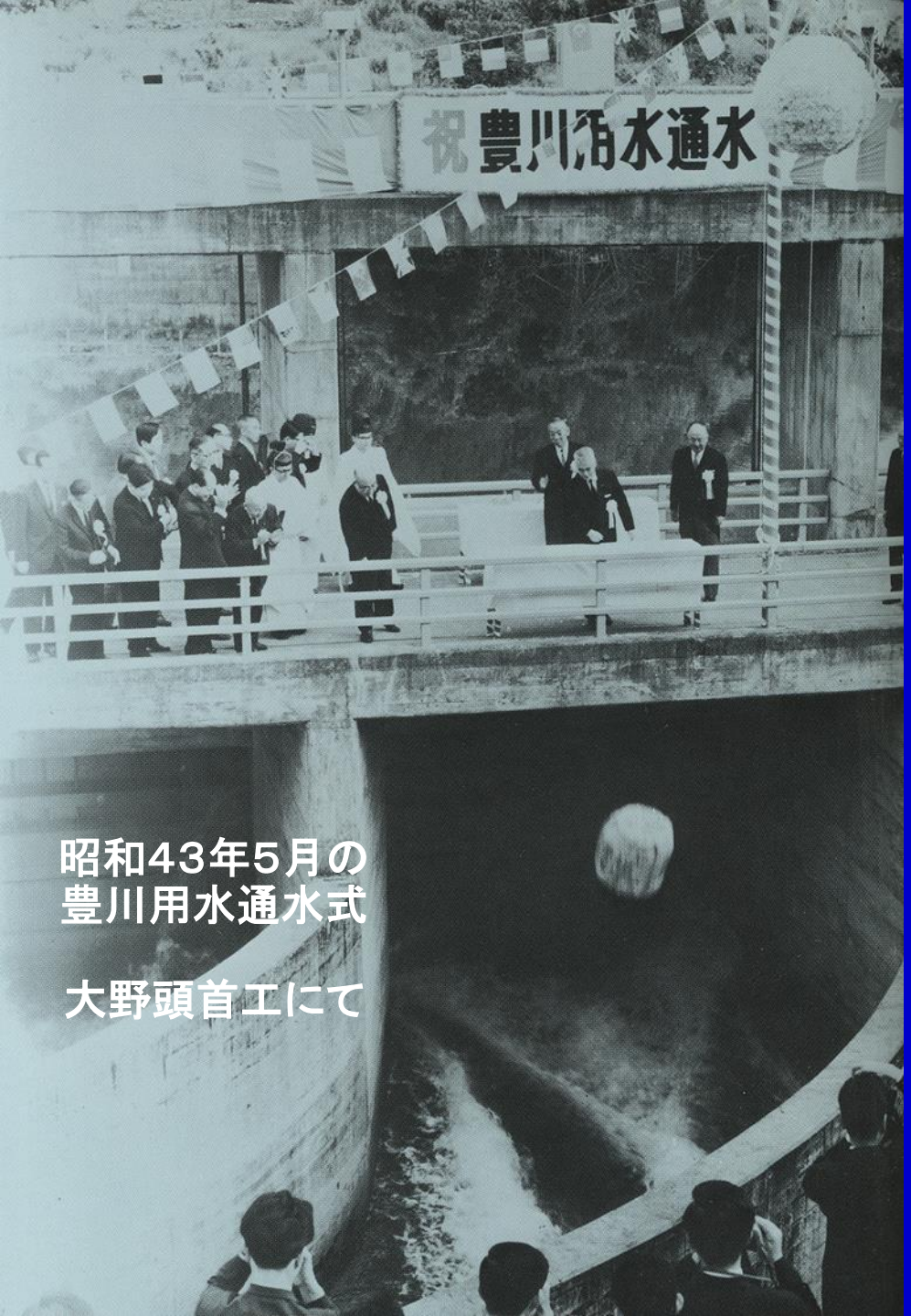
日照りが続くと、溜池の水をひしゃくで汲み、水桶に入れて牛車で畑まで運んだ。

渥美郡の水源別灌漑面積（昭和24年）

藤城信幸氏作成「近藤寿市郎と豊川用水」PPt　より転用



『豊川用水史』より



昭和43年5月の
豊川用水通水式

大野頭首工にて

昭和43（1968）年、19年の歳月と
488億円の工費を投じて
豊川用水が完成した。
その後、渥美半島の農業は
飛躍的な発展を遂げる。

藤城信幸氏作成「近藤寿市郎と豊川用水」PPt　より転用

渥美半島と戦争

近代化遺産

（戦争遺跡）

- **伊良湖射場**
- **本土決戦（陣地構築）**

伊良湖射場跡（哨舎）

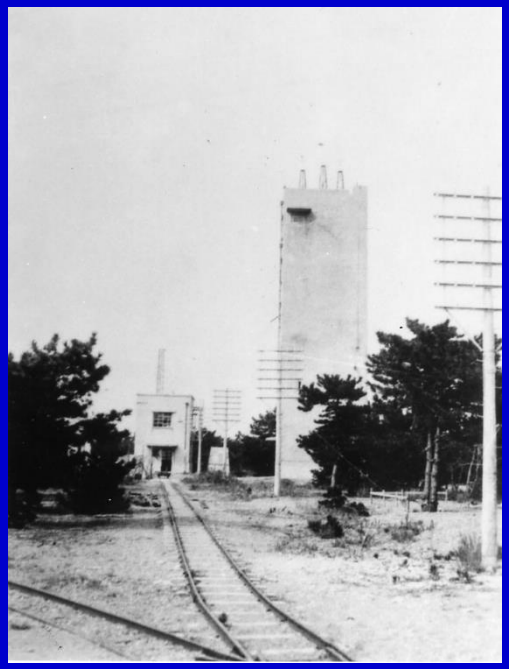
渥美線鉄道敷（石神地内）

- **伊良湖村の移転**
- **西山の開拓（戦後）**
- **まぼろしの渥美線**
- **渥美線機銃掃射事件（S20.8.14）**
- **青い目の人形（田原中部小）と新青い目の人形（福江小）**

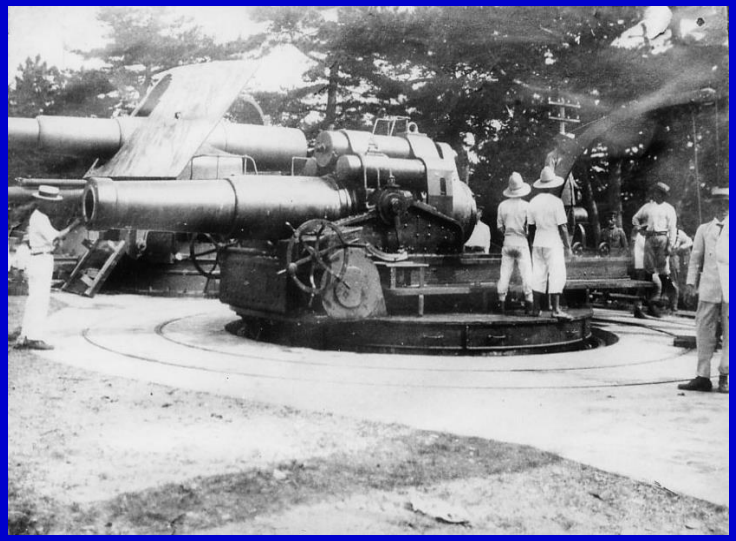
気象塔兼展望塔

（六階建）

畠（福江）観測所



←当時の写真→



伊良湖射場旧砲床

伊良湖岬航空写真

外浜観測所（旧景・現景）

ご清聴ありがとうございました

終